

明神崎遺跡 発掘調査報告書

1990

山形県
山形県教育委員会

みょう じん ざき
明 神 崎 遺 跡
発 掘 調 査 報 告 書

平成 2 年 3 月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が平成元年度に実施した都市計画街路事業道路改良工事「高畠都市計画道路3・4・1号幸町泉岡線」に伴う「明神崎遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査では奈良～平安時代の掘立柱建物跡、溝跡、土壙などの遺構が発見され、縄文時代、古墳時代の遺物も出土しました。今回の調査区内を縦断する溝跡は奈良時代に掘られ、平安時代の前半には埋没したことが明らかとなりました。残念ながら、この溝と同時代の住居跡は調査区内で見つかりませんでしたが、本遺跡はこの時代の集落であったものと思われます。高畠町内には一部奈良時代まで降る群集墳が多数発見されており、これらを核として「風土記の丘」の整備事業が計画されています。ところが、現在までのところ、これらと同時代の集落の調査はなく、古墳の被葬者等不明な部分が多くあったわけですが、この調査を契機として、こういった問題も序々に解明されていくものと期待されます。

埋蔵文化財を含む文化遺跡は私たちの祖先の歴史を語る資料として、かけがえのないものです。これらを保護し未来へ継承していくことは、現代に生きる私共の重要な責務と考えます。

山形県教育委員会では、このような立場で文化財の保護を図り、発掘された資料の公開と活用についても努力していく所存です。

最後になりましたが、調査にあたってご協力頂きました地元の方々、高畠町教育委員会、山形県土木部、そして、ご指導頂きました関係各位に感謝申し上げるとともに、本書が研究と埋蔵文化財の保護・普及の一助になれば幸いです。

平成2年3月

山形県教育委員会

教育長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成元年度に実施した都市計画街路事業道路改良工事「高畠都市計画道路3・4・1号幸町泉岡線」に伴う「明神崎遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成元年6月19日から同年9月1日まで、延べ46日間にわたって行った。
- 3 遺跡の所在地は山形県東置賜郡高畠町大字泉岡字明神崎210番地外に所在する。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治

佐藤 正俊

現場主任 渋谷 孝雄

調査員 氏家 信行

長橋 至

事務局 事務局長 土門 紹穂

同補 佐 斎藤 久子

事務局員 新開 紘子 長谷川 浩 高橋 春雄 永井 健郎

- 5 発掘調査にあたっては高畠町教育委員会、山形県土木部都市計画課、米沢建設事務所道路計画課、東南置賜教育事務所など関係機関のご協力を得た。

- 6 本書の作成は渋谷孝雄、氏家信行が担当した。遺構図の作成は氏家、遺物の実測図は渋谷が分担し、本文の執筆は両名の協議のうえ、I～IV章、V章2、VI章2、VII章2、VIII章、IX章を渋谷が、V章1、VI章1、VII章1を氏家が分担した。遺物の実測、浄書、版組にあたっては、前田和子、山内知恵子、伊豆倉弘子、進藤純子の補助を得た。

編集は安部 実、渋谷孝雄が担当し、全体の総括を佐々木洋治が行った。

- 7 遺跡の古環境と基本層位の理解について、山形大学教育学部の阿子島 功氏にご教示を賜り、また、つぎの方々から現地調査、報告書作成の過程で種々のご指導とご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

柏倉亮吉 加藤 稔 川崎利夫 船木義勝 佐久間 豊 栗田則久 笹生 衛 柴田
陽一郎(順不同 敬称略)

目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	
1	遺跡の立地	1
2	歴史的環境	2
III	発掘調査の経過	4
IV	遺跡の概観	
1	遺跡の基本層序	7
2	遺構と遺物の分布	7
V	A区の遺構と遺物	
1	遺構	12
2	遺物	21
VI	B区の遺構と遺物	
1	遺構	27
2	遺物	32
VII	C区の遺構と遺物	
1	遺構	34
2	遺物	39
VIII	考 察	
1	遺物の年代	42
2	遺構の年代	44
IX	まとめ	44

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 グリッド配置図	5
第3図 層序断面図	8
第4図 A・B区遺構分布図	9、10
第5図 C区遺構分布図	11
第6図 SD101平面図他(1)	14
第7図 SD101平面図他(2)	15
第8図 SD101平面図他(3)	16
第9図 SD101平面図他(4)	17
第10図 SX104・SK105他平面・断面図	19、20
第11図 A区出土遺物(1)	22
第12図 A区出土遺物(2)	23
第13図 A区出土遺物(3)	24
第14図 A区出土遺物(4)	25
第15図 SX204・SK206平面・断面図	28
第16図 SX205平面・断面図	30
第17図 EU210と出土土器	31
第18図 B区出土土器・土製品・B・C区出土石器	33
第19図 SB310・311平面・断面図	35
第20図 SD301平面図	36
第21図 SD302・308・SX309平面・断面図他	37
第22図 C区出土遺物(1)	40
第23図 C区出土遺物(2)	41

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景(南から) A区SD101出土状況
- 図版2 A区全景(南から) A区全景(北から)
- 図版3 B区Ⅰ期全景 B区Ⅱ期全景
- 図版4 C区Ⅰ期全景 C区Ⅱ期全景
- 図版5 A区南半遺構検出状況 SD101RP26 SD101RP33・34 SD101RP38
SD101RP42 SD101層位断面 SD101土器出土状況(15-20区)
SD101土器出土状況(14-19区)
- 図版6 SX104全景 SX104土器出土状況 SD101南半全景 SD110~114全景
SD106(101)全景 SD106(101)RP57 SD106(101)RP102・103 SD115層位断面
- 図版7 SK105全景 IV層の落込み B区Ⅰ期遺構検出状況 SD201層位断面(14・15-
28) SD202層位断面 SD201RP82 SD201層位断面(14・15-34) SK206RP85
出土状況
- 図版8 SX204RP87 SX204層位断面 EU210検出状況 EU210内部
EU210層位断面 SP212柱根 SP213~216 B区基本層序
- 図版9 C区検出状況Ⅰ期 SB310EB1 SB310EB2 SD301層位断面
SD301RP11・12 C区Ⅱ期遺構検出状況 SD301RP62~64 C区IV層石器出土状
況
- 図版10 出土遺物(1)
- 図版11 出土遺物(2)
- 図版12 出土遺物(3)

付 表 目 次

表-1 土器観察表(1).....	45
表-2 土器観察表(2).....	46
表-3 土器観察表(3).....	47

凡 例

- 1 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1970)を使用した。
- 2 本書で使用した分類番号は下記のとおりである。
SB.....建物跡、EB.....掘り方、SK.....土壤、SD.....溝跡、SP.....ピット
EU.....埋設土器、SX.....性格不明の落込み、RP.....登録した土器、RQ.....登録した石器、RM.....登録した鉄製品
- 3 挿図中の方針は磁北を示している。造構の挿図縮尺は $1/10$ 、 $1/40$ 、 $1/60$ と不統一であり各々にスケールを示した。遺物の縮尺は土器、陶器は $1/3$ 、土製品、石器は $2/3$ 、 $1/2$ とし、各々にスケールを示した。
図版の遺物は $1/4$ とした。
- 4 遺物は原則として $1/4$ 以上残存するものを実測対象としたが、甕等の大形の器種については $1/4$ 以下でも実測を行った。なお、実測図のなかで、断面黒ベタは須恵器、白ヌキは土師器、点描は陶器、赤焼土器であり、土器の内外面に網点が施されているものは黒色化処理のあることを示している。
遺物番号は挿図、写真図版とも共通する。

I 発掘調査に至る経過

明神崎遺跡は昭和36年に地権者によって須恵器の破片が採集され、翌37年に県下一斎に行われた埋蔵文化財包蔵地調査により、奈良時代の集落跡として登録された。その後、昭和51年3月の埋蔵文化財包蔵地調査の結果を経て、昭和53年3月に発行された「山形県遺跡地図」に遺跡番号1,292として掲載され、広く周知されることとなった。高畠町教育委員会では昭和58年6月に本遺跡付近で踏査を行い、遺跡地図に示された範囲より北側、西側の地区において須恵器片、剝片等を採取し、遺跡の範囲が拡大するとの予測をもつに至った。平成元年1月、高畠町教育委員会では、遺物を採取した地区において、都市計画街路事業道路改良工事が行われるとの情報をキャッチし、町の担当課から工事担当の山形県土木部米沢建設事務所に連絡するとともに、山形県教育委員会に文書で報告を行った。

連絡を受けた山形県土木部都市計画課では平成元年2月22日付け都計第1085号で教育庁文化課長あてに埋蔵文化財包蔵地の分布調査を依頼し、これを受けた山形県教育委員会では平成元年3月1日に現地確認調査を、3月6・7日には用地取得済の町道塩ノ森線以東の部分について、試掘調査を実施した。1×1mの試掘溝21ヶ所のうち7ヶ所で遺構や遺物が検出され、町道塩ノ森線の東180m程までは、確実に明神崎遺跡の中に入ることが確認された。山形県教育委員会では、平成元年3月9日付け文化第1000号で土木部あてに調査結果を報告するとともに、ただちに遺跡保護についての協議に入った。事業計画の進行状況からみて、事業計画の変更による遺跡の現状保存は困難であり、記録保存のための緊急発掘調査を実施する方向で協議が進み、年度末ではあったが、平成元年度事業として発掘調査が行われる運びとなった。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地と自然的環境

明神崎遺跡は高畠町役場の南方約600mの高畠町大字泉岡字明神崎に所在する。現在の地目はりんご、ラ・フランスを中心とする果樹畠や宅地、水田等となっている。遺跡の東側に接して「大宮子安神社」のある標高240mの明神山、南側に接して「虚空藏尊」のある標高290mの虚空藏山があり、北側と西側が開けた山麓の平地に立地する。今回の調査対象地区の標高は約221mを測る。

高畠町を貫流する屋代川は上山境の柏木峠付近を源とし、二井宿で向きを西に変え、大字高畠で置賜盆地に入る。現在は高畠町の中心部の北を流れているが、かつては町の中心

部の南側を流れていた時期もあり、明神山の東側に接して旧河道の痕跡が認められる。また、今回の調査により、本遺跡の縄文時代の前期の遺物包含層であるIV層が落込む窪地が確認されており、現在の地形面が安定するのは、縄文時代前期から古墳時代前期までの間と言ってよい。

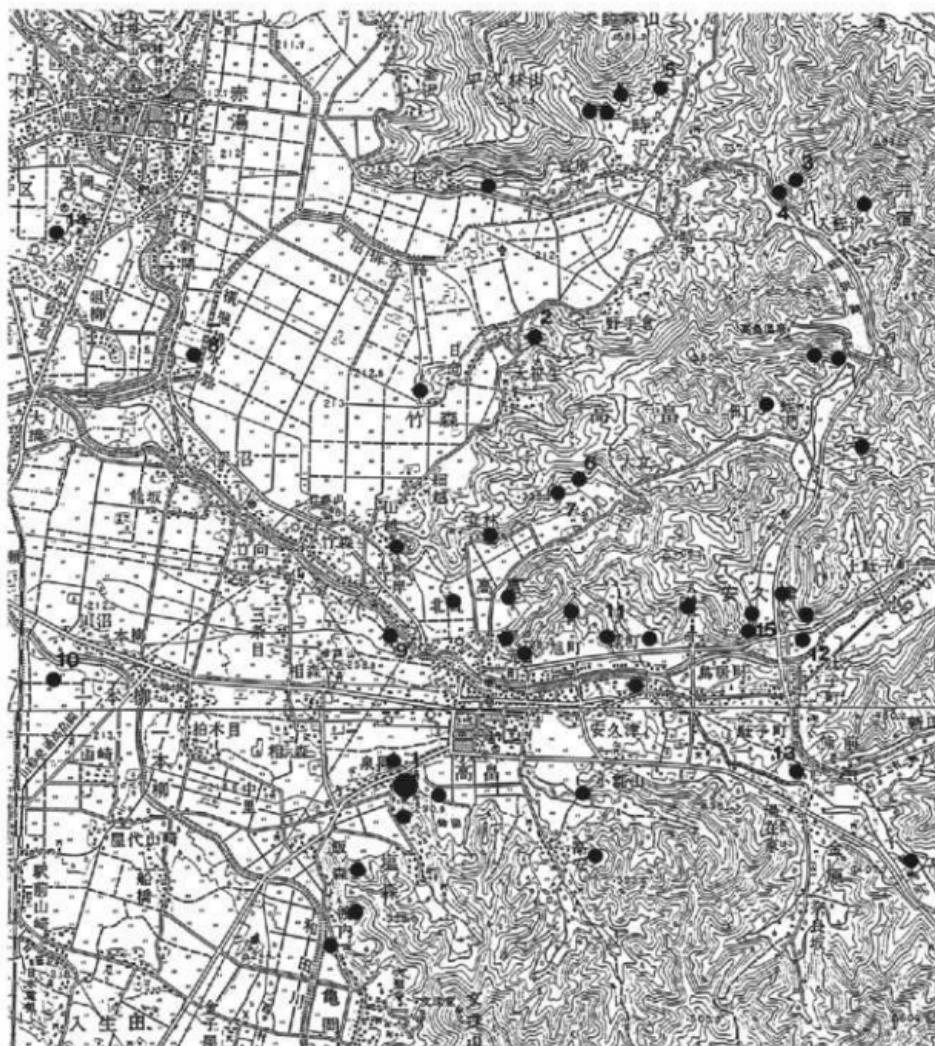
2 歴史的環境(第1図)

高畠町には現在までに国指定の史跡4ヶ所を含む120ヶ所余りの遺跡が確認されている。これらの遺跡のうち昭和30年から40年代にかけて発掘調査が行われた日向洞窟遺跡(2)、大立洞窟遺跡(6)、一ノ沢岩陰遺跡(3)、火箱岩洞窟遺跡(5)は我国の縄文文化の始源を考えるうえで極めて貴重であることをもって、国の史跡に指定されている。昭和63年、平成元年には日向洞窟の西方約150mの地点で都市計画道路の建設に先立つ緊急発掘調査が行われ、調査地区は日向洞窟西地区と名づけられた。西地区からは洞窟遺跡の最下層と同じ隆線文土器が出土し、尖頭器、石鏃、半月形石器、局部磨製石斧、有溝砥石等、おびただしい量の石器が共伴した。これらの遺物を含む層はさらに西側にも広がりを持ち、洞窟の前面には当該期としては想像を絶する程の遺物が埋蔵されているものと予測される。

縄文時代前期では大谷地にある押出遺跡(8)が注目を浴びた。昭和60年から3ヶ年にわたりて米沢・南陽道路建設工事に係る緊急発掘調査が行われ、低地性集落であることが判明した。4,000m²の調査区内から39棟の打込み柱の住居跡が検出された。この中には柱が幾重にも回るものや、マウンドをもつものもあり、柱は地下2mの検出面から、深いもので1.5m程突きささっていた。遺物は大木4式の土器と赤漆、黒漆で文様が描かれた彩文土器、石鏃やつまみのついた尖須器などの石器類のほか、低湿地ならではの木製品、クッキー状炭化物等、これまでの縄文時代のイメージを一変させる貴重な成果が得られた。

縄文時代後期では石ケ森遺跡(9)が二度にわたって調査され、新地1~4式を中心とする土器群と竪穴住居跡9棟、土壙11基等が検出されている。

高畠町の遺跡では縄文時代の洞窟群とともに古墳時代末葉から奈良時代にかけての群集墳にも特筆すべきものがある。これらは屋代川右岸の丘陵と山麓斜面に立地する一群と屋代川左岸の丘陵縁辺部に立地する一群がある。これらのうち前者に属する清水前古墳群(12)は昭和30年に県指定史跡となり、昭和48年には復元整備のための発掘調査が行われた。昭和59年には北目1号墳、鳥居町9号墳の発掘調査が行われ、同年には、北目古墳群、羽山古墳群、源福寿古墳群、加茂山古墳群、加茂山洞窟古墳、安久津古墳群、味噌根古墳群、鳥居町古墳群の合わせて35基が一括して安久津古墳群(11)として県指定の史跡となった。このほか、昭和61年には山の神1号墳(15)が発見され調査された。古墳時代の集落では寝庵遺跡(10)が昭和60年と63年に調査され、6世紀代の遺構と遺物が検出された。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	明神崎遺跡	(縦文~平安)	2	日向洞窟遺跡	(縦文)	3	一ノ沢岩陰遺跡	(縦文)
4	一ノ沢遺跡	(縦文)	5	火箱塔洞窟遺跡	(縦文)	6	大立洞窟遺跡	(縦文)
7	大立岩陰遺跡	(縦文)	8	押出遺跡	(縦文)	9	石ヶ森遺跡	(縦文)
10	襄鹿遺跡	(古墳)	11	安久津古墳群	(古墳~奈良)	12	清水前古墳	(奈良)
13	金原古墳	(奈良)	14	稻荷森古墳	(古墳)	15	山の神I号墳	(奈良)

第1図 明神崎遺跡位置図(S=1:50,000)

III 発掘調査の経過

発掘調査は平成元年6月19日から9月1日まで、実質延べ日数46日間実施した。発掘調査対象地区は幅員16mの都市計画道路用地内で、2本の水路によって3ヶ所に分断されていたため、排土置場の確保ができない西側の2地区(B・C区)ではI期・II期に分けて調査を行った。発掘面積はA区が745m²、B区が740m²、C区が115m²で、合計1,600m²となった。以下にその経過を記す。

6月19日～6月23日

19日に事務所の設営、器材の搬入を行い、午後から関係者で安全を祈願する歓迎式を行う。その後、調査区内の草刈り、杭打ち等の環境整備を行う。20日からバックホーによる表土除去に入る。B区のI期分(東半部)は20日中に終了し、21日から23日までA区の表土除去と排土処理を行う。また、C区は調査区内の環境整備の後、手掘りによる粗掘りに入る。B区のI期分については面精査が終わり、溝状遺構、落込み等を検出した。

6月26日～6月30日

A区は西側から面整理に入り約250m²分が終了し、L字状に曲がる溝跡や落込み等が検出された。L字状に曲がる溝跡には須恵器壺、壺、土師器壺等奈良～平安時代の土器が含まれている。B区は平板で100分の1の平面略測図の作成を行う。C区は地表から約60cm掘り下げたところで遺物を含む層に達した。とりあげた遺物は整理箱に約2箱。

7月3日～7月7日

A区の面整理は6日で終了。引き続き2回目の面ケズリを行い、奈良～平安時代の土器を含む溝跡4条と、概ね東西方向に走る溝跡4条、落込み等を検出したが、竪穴住居跡は発見できなかった。7日に遺構検出状況の写真撮影を行い、100分の1の略測図の作成に入る。C区は引き続き遺物を含む層の掘り下げを行う。とりあげた遺物は0.5箱分。

7月10日～14日

A区は100分の1の略測図の作成が終了。B区では面ケズリで遺構の再確認を行った後、溝跡2条の精査に入る。C区では10日までに遺構の検出作業が終了した。掘立柱建物の一部とみられる柱列が2、溝跡が4条、落込み1基他を検出し、遺構の登録(300番台)、写真撮影の後、これらの精査を行い、14日までに平面、断面実測と写真撮影等、IV層上面の調査が終了する。SD301、SX309等から一括土器が出土した。

7月17日～21日

A区は再び面ケズリを行いSD101、102を登録し、西端から精査に入る。21日まで15～20区の堆積土1層の除去が終了。B区はIV層上面で確認された奈良～平安時代の遺構の精査

第2図 グリッド配線図



が19日まで終了し、20日までにこれらの写真撮影と平面、断面実測も終了した。21日からは古墳時代の土器を含む落込みSX205の掘り下げに入る。C区は奈良～平安時代の遺構の地山であるIV層の掘り下げを行い、両面加工で尖頭器様の石匙(RQ1)と磨滅の著しい所属時代が不明な土器片等が出土した。

7月24日～27日

A区はSD101、102の掘り下げ精査を続行し、102は終了、101も14～19区内のほぼ底面まで掘り下げが終了。B区はSX205の精査が終了し、7個体の土器を登録した。これらの土器は脆く、復元は難しいようである。

8月1日～4日

A区はSD101、SX103の精査がほぼ終了する。SD101から出土した土器の平面実測とレベリング、層位断面図の作成も併行して実施し、14～19区内まで終了する。B、C区は2日から重機による埋戻しを行い、引き続きII期分の表土除去に入り4日までに排土処理まで終了。A区SD101でRP19～44を登録。

8月7日～11日

A区はSD101から出土した土器の平面実測を行い、レベリング後に収納し、SD101の調査を終了する。B区は7日に面精査を行い、8～11日にかけて中央部を走るSD201、202及び、SD207と柱穴群の精査がほぼ終了する。この作業と併行して、各遺構の断面図と100分の1の略測図の作成を行う。C区は8日に遺構検出作業を行い、溝跡3条、柱穴9基を検出、9～11日までにこれらの精査と平面、断面図、写真撮影等の諸記録まで終了する。遺物はA区でRP45、46、B区でRP82、83、C区でRP62～72、RQ73を登録。

8月21日～25日

A区は東半部の遺構の再確認を行い、SX104、SD110～114、SD106の精査に入る。この途中でSD106は、SD101から連続する溝であることが確実となった。B区は古墳時代の土器を含むSX204、SK206、SD208、209、EU210の精査と平面、断面実測、写真撮影を行い、B区の調査を完了する。B区でRP85～94、RM84を登録。

8月28日～9月1日

A区のSD106、SK105、SD115の精査を行い、31日までに平面、断面実測等が終了する。30日にA区の全体撮影と個々の遺構の完掘状況の写真撮影を行う。また、30日の午後に現地説明会を開催し、調査成果についての説明を行った。28名の参加があった。31日、1日に山形大学の阿子島先生に遺跡の古地形と基本層序について、A区に設定した3ヶ所の深掘り区の断面をもとに指導を頂いた。C区はIV層の掘り下げを行い、調査を終了した。1日に事務所の撤収を行い、現地調査を終了した。

IV 遺跡の概観

1 遺跡の基本層序(第3図)

調査区の地目は果樹園、畠地、宅地であり、奈良～平安時代の遺構確認面までの基本層序はA、B、C区でやや異なっている。I層は常に擾乱を受けている耕作土である。II層はA、B区で10～25cmの、C区で20～45cmの層厚をもち、近年の擾乱は受けていないものと理解された。III層はB、C区に認められ、A区にはなかった。この層には奈良～平安時代の土器が含まれている。III₂層はB区に部分的に存在し、古墳時代、奈良～平安時代の土器が含まれている。

古墳時代と奈良～平安時代の遺構の地山となるIV層はA～C各区に共通する。C区ではこの層に縄文時代の石器と時期不明の土器片が含まれていた。高島町押出遺跡のVII層と同時期に形成されたものである可能性がある。A区の9～12-13～16区では、この層が最大で65cm程落込み、その上にIV_a、IV_bの堆積が認められ、下位にIV_c、IV_d、IV_eの砂ないしは砂礫層が伴う。平面的にその分布をみると明神山、虚空藏山の鞍部へと続くことから、この方向からの水流によって形成されたものとみることが可能である。IV層の形成時期は、尖頭状の石匙が縄文時代前期に特有のものであるとすれば、縄文時代前期ということになり、これを遡る時期に、この部分に東側からの水流があったものと考えることができる。

2 遺構の分布

A 区(第4図)

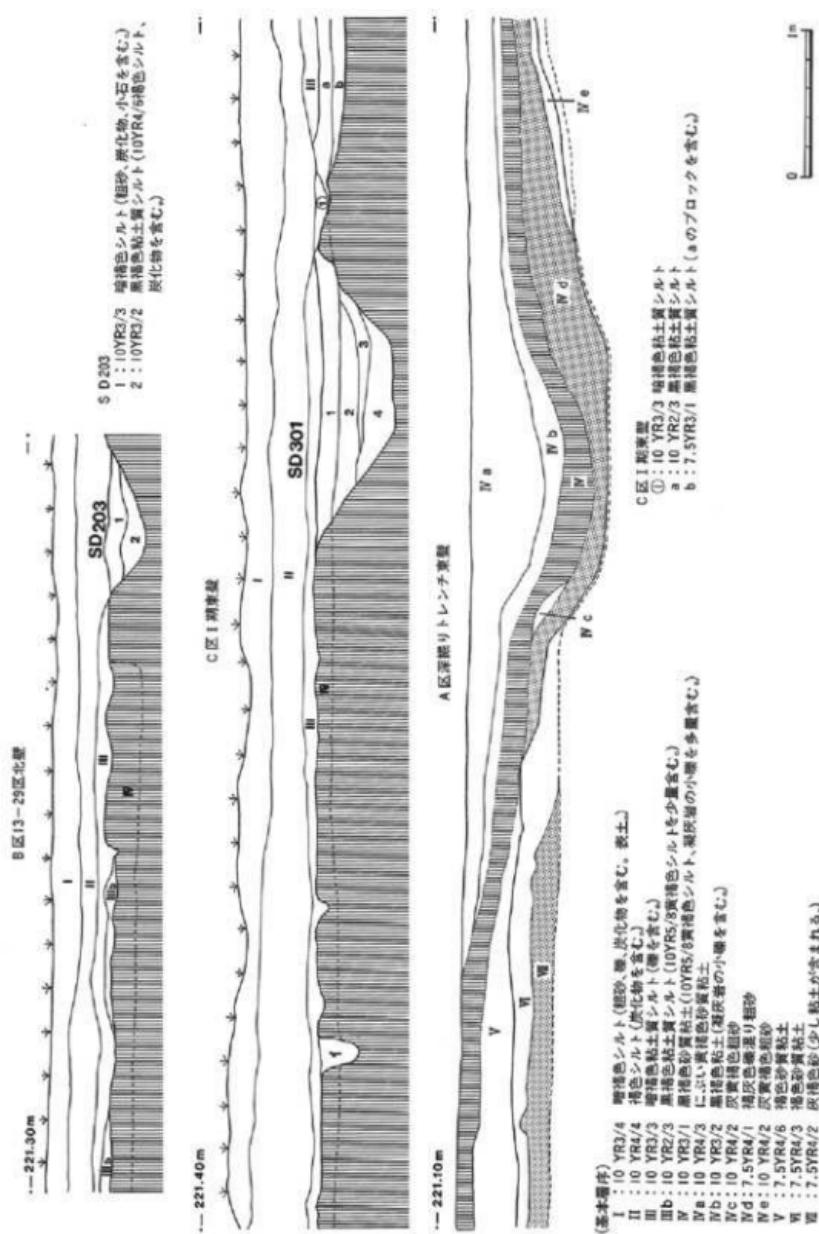
A区で検出した遺構は溝跡13条、土壙1基、性格不明の落込み2基である。これらの遺構のうち、SX103からは江戸時代の唐津系の陶器が出土している。SD110～114の溝跡群からは新しい時代の遺物の出土はないものの、堆積土はSX103に極めてよく類似していることから、これらはほぼ同じ時代の所産と考えられる。

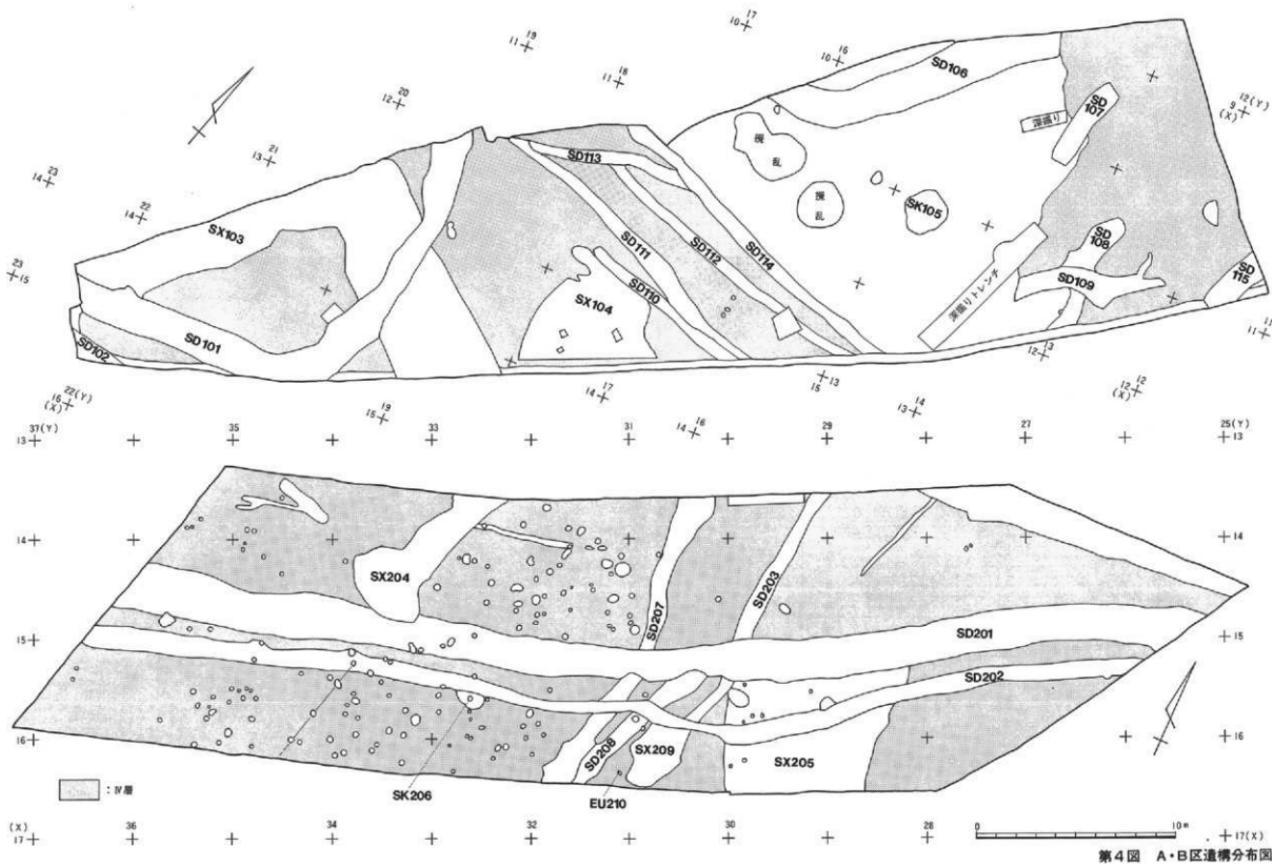
SD101は14～20区まではほぼ東西の走向を示すが、14、15～19、20の各グリッドの交点付近でほぼ直角に向きを変え、12～19区で調査区外へと延びている。10～16区内で調査区に出現し、9～14区で調査区外へ抜ける溝SD106は幅、深さ、堆積土の状態から見てSD101が調査区外の10～19区付近で再び東西方向に折れ曲がったものとみることができる。調査の東部にはSD107、108、115のはば南北に走る溝が検出されており、SD109はSD108を切っている。土壙は調査区の東部で1基だけ確認された。性格不明の落込みSX104は調査区のほぼ中央に位置する。

B 区(第4図)

B区では溝跡5条、柱穴が約150基、土壙1基、埋設土器が1基、性格不明の落込みが3

第3図 土層断面図





第4図 A・B区遺構分布図

基検出された。これらの遺構のうちSD201、202はそれぞれA区のSD101、102から連続する同一の溝跡と考えられる。調査区の中央や東寄りに位置するSD203、207、208はほぼ南北の走向をもち、いずれもSD201、202に切られている。

柱穴群はSD207の西側に集中する傾向がみられ、調査区の西部では少なくなる。これらの中には確実にSD201、202を切るものが認められる。

土壙SK206は調査区の中央西寄りに位置し、復元できなかつたが古墳時代前期の坏が出土している。埋設土器EU210は調査区の中央の南部に位置する。土器は古墳時代前期の壺である。

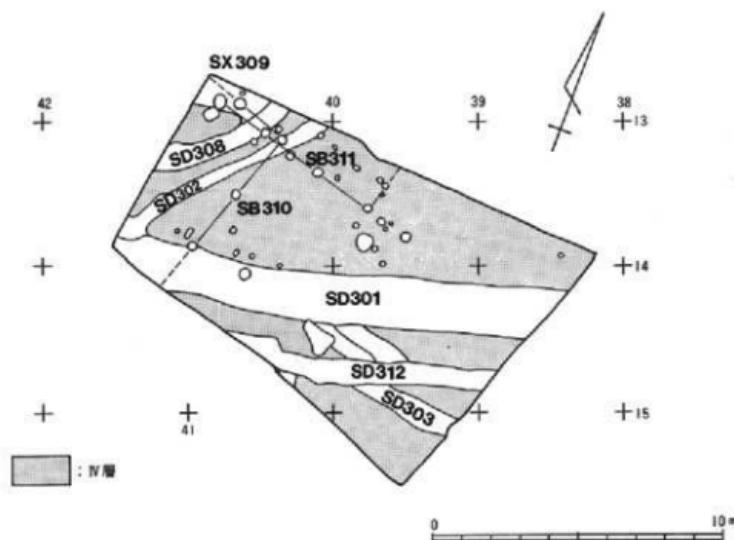
性格不明の落込みSX204、205、209からは古墳時代前期の土師器だけが出土し、それ以降の遺物は認められなかつた。

C 区(第5図)

C区では2棟の掘立柱建物跡と溝跡5条、柱穴30基落込み1基等を検出した。このうち、SB310、311の掘立柱建物跡はいずれも部分的な検出であり、規模等は不明である。

5条の溝跡のうち、SD301、312はそれぞれB区の201、202から連続するものと考えられ、SD301は掘立柱建物跡のSB310に切られている。

柱穴は西半部に集中しており、東半部には少ない。



第5図 C区遺構分布図

V A区の遺構と遺物

1 遺構

(1) 溝跡

SD101(106)溝跡(第6～9図 図版1、2、5、6)

A区の南西側、12～14～19～22区で検出された。14～20区までSX103と交差して南北に走り、そこで西方に向きを変える。IV層上面で確認され、幅1.32～2.08m、確認面からの深さ62～74cmで調査区内での長さ27.5mを測る。走向は12～19区から14～20区まではN-5°-W、それ以西はN-76°-Eとなる。断面形は、北側がV字状になり、西側がU字状となる。底面はほぼ平坦である。覆土は、大きく4層に分かれ、各層から奈良時代～平安時代の須恵器や土師器が29個体出土している。この溝跡は、A区の北東側で検出されたSD106溝跡とB区のSD201溝跡、さらにC区のSD301溝跡と連続するものと考えられる。

SD106溝跡はA区の北東側、8～10～13～16区で検出された。IV_a層中で確認され、幅1.70～2.21m、確認面からの深さ66cm、調査区内での長さ13mで、N-28°-Eの走向をもつ。断面形はV字状を呈し、底面は平坦である。覆土は、大きく4層に分かれ、遺物は奈良時代～平安時代の須恵器や土師器が9点出土した。

SD102溝跡(第4図)

A区の南西隅、15～21～22区のIV層上面で検出された。B区のSD202溝跡とC区のSD312溝跡に連続すると考えられる。その他、詳細はA区内では不明。

SD107溝跡(第4図 図版2)

A区の北東側、9～10～13区のIV層上面で検出された。走向はN-Sである。幅0.80～1.17m、確認面からの深さ32～60cm、全長4.6mである。覆土は2層、断面形はU字状、底面は平坦である。南から北にかけて深さは浅くなる。

SD108・109溝跡(第4、10図 図版2)

A区の南西側、10～11～12～13区のIV層上面で検出された。走向はN-18°-E(SD108)とN-52°-E(SD109)で、重複している。幅80～156cm、確認面からの深さ23～40cm、調査区内での長さ6.0～7.5m、断面形はV字状、底面は平坦で覆土は2層。SD109が108を切っている。

SD110溝跡(第4、10図 図版6)

12～13～16～17区のIV層上面で検出された。走向はN-88°-Eである。幅45～69cm、確認面からの深さ32cm、調査区内での長さ8.7mである。断面形はU字状、底面は平坦、覆土は2層である。

SD111溝跡(第4、10図 図版6)

11～13・16～18区のIV層上面で検出された。走向はN-84°-Wである。幅55～113cm、確認面からの深さ15～19cm、調査区内での長さ16.0mを測る。覆土は1層、断面形は眼鏡状で底面は凹凸がある。

SD112溝跡(第4図 図版6)

11～13・15～17区のIV層で検出される。走向はE-Wである。幅48～62cm、確認面からの深さ20～28cmで長さ15.0mを測る。覆土は1層、断面形はV字状、底面は平坦である。

SD113溝跡(第4、10図 図版6)

11～17～18区のIV層で検出される。走向はN-59°-Eである。幅50～70cm、確認面からの深さ21cm、調査区内での長さ7.7mを測る。覆土は1層で断面形はU字状を呈す。底面はほぼ平坦である。

SD114溝跡(第4、10図 図版6)

11～12・14～17区のIV層で検出される。走向はN-85°-Wである。幅55～89cm、確認面からの深さ25cmで調査区内での長さ16.2mを測る。覆土は1層、断面形はV字状で底面は平坦である。

SD115溝跡(第10図 図版6)

A区の南東側、11～10区のIV層で検出された。走向はN-12°-Eである。幅135～138cm、確認面からの深さ57cmで調査区内での長さ3.4mを測る。断面形はV字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれ、2・3層に炭化物を多く含む。遺物は、奈良時代後期の土師器の壺や土器片が出土した。

(2) 土 壤

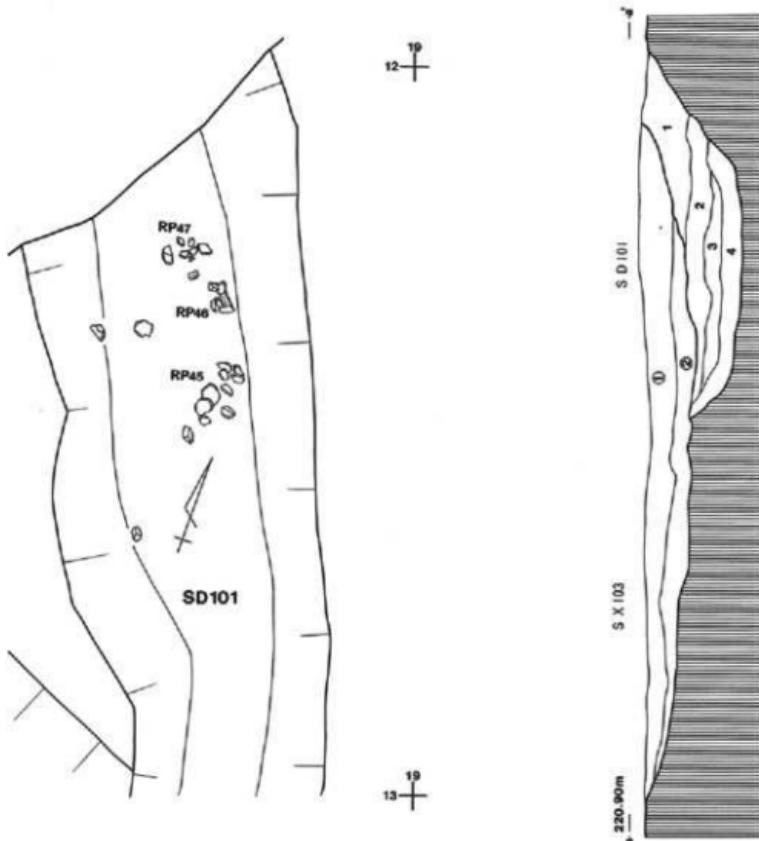
SK105土壤(第10図 図版7)

A区の東側、10～11・14区のIV層で検出した不整円形のプランをもつ土壤で、東西200cm、南北228cm、確認面からの深さは7～8cmを測る。断面形は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は2層に分かれ、上層に炭化物を含み、下層は薄い砂質シルトである。底面の北側に直径40cm程の炭化物層が検出されている。遺物は出土していない。

(3) 落 込 み

平面的な形が定まらず、確認面からの深さが比較的浅いものを落込み(SX)として登録した。大きさもさまざまである。遺物の出土がないもの、多くの土器が出土したものなどいろいろで、厳密には土壤との区別が困難である。本報では原則として登録時のものを踏襲した。

SX103落込み(第4、6図 図版2)



S D 101

- 1 : 10 YR3/3 灰褐色シルト(同4/6褐色シルト若干量と炭化物を含む。)
- 2 : 10 YR2/2 黑褐色粘土(7.5 YR4/6褐色シルト、土器を含む。)
- 3a : 10 YR3/2 黑褐色砂質粘土(7.5YR3/4暗褐色シルト、砂を含む。)
- 3b : 10 YR3/1 黑褐色砂質粘土(7.5YR5/6明褐色シルト、7.5YR3/4暗褐色シルトを若干含む。)
- 4 : 10 YR2/2 黑褐色粘土(7.5YR5/8明褐色シルトを含む。)

S X 103

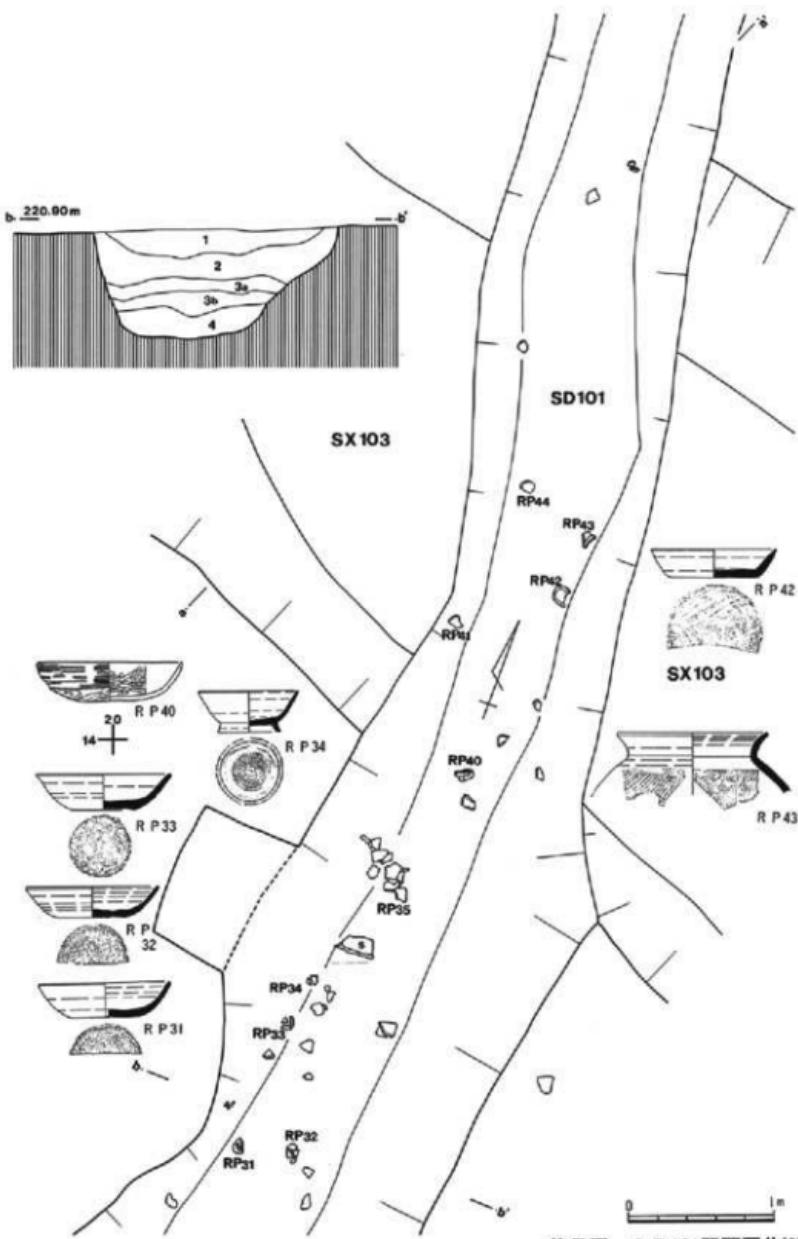
- ① : 10 YR3/4 暗褐色砂質シルト(同4/2灰褐色粘土ブロックを多量含み、やわらかくしまりない。)
- ② : 10 YR3/2 黑褐色粘土質シルト(大粒の炭化物を若干、粗糾も若干含む。)

S D 101

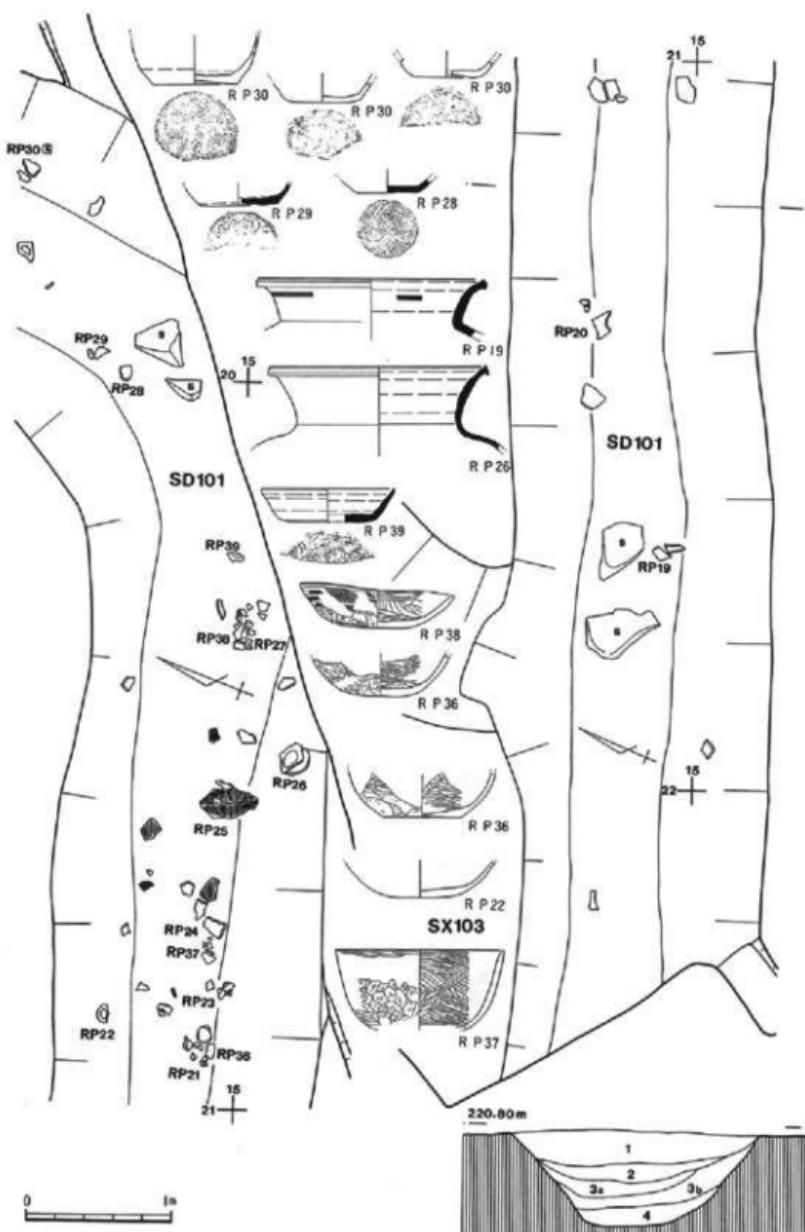
- 1 : 7.5YR4/2 灰褐色シルト(同3/3暗褐色シルトのブロックを斑状に含み、若干の炭化物を混入する。)
- 2 : 10 YR3/3 暗褐色シルト質粘土(7.5YR3/3暗褐色細砂が満状に混り合う。土器を含む。)
- 3 : 10 YR2/3 黑褐色粘土質シルト(同3/3暗褐色シルトの大ブロックを若干含む。)
- 4 : 10 YR3/2 黑褐色砂質粘土(炭化鉄を含む。ほぼ純粹。)

0 1m

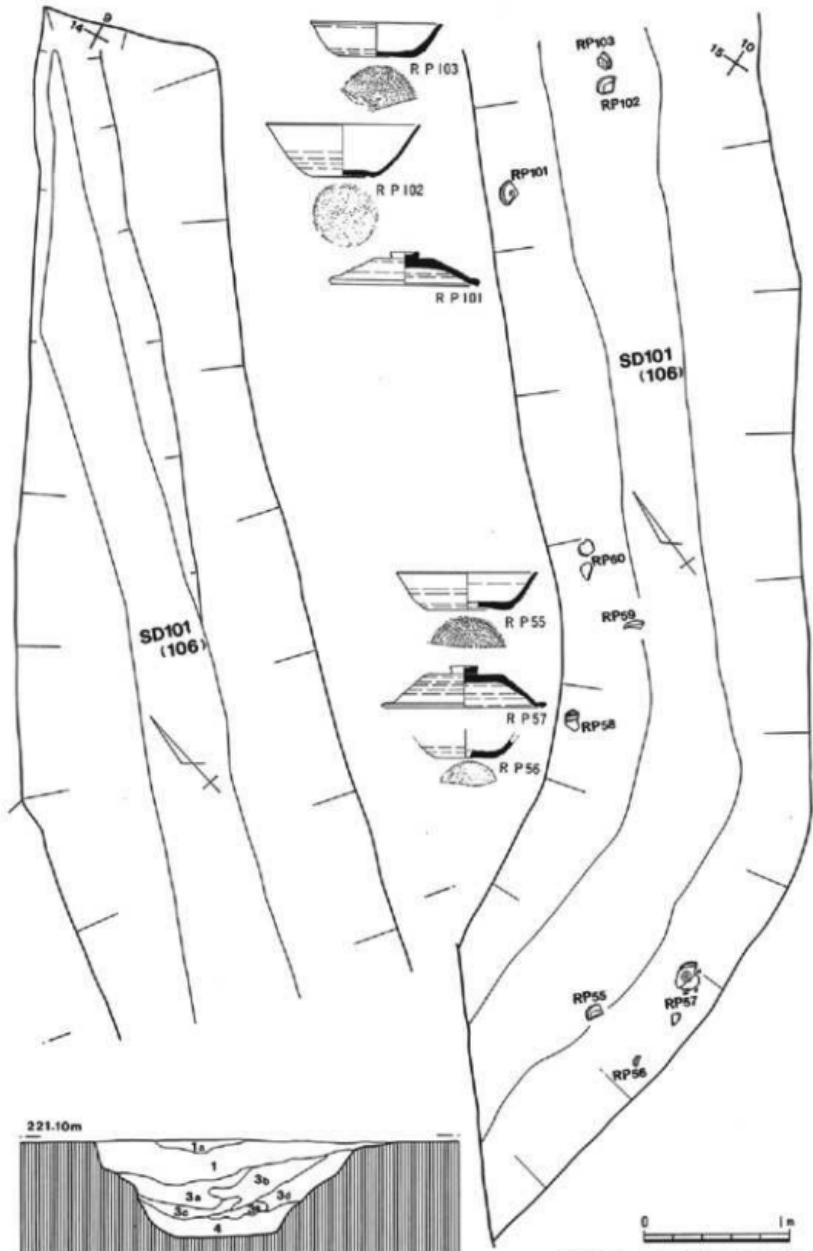
第6図 SD101平面図他(1)



第7図 SD101平面図他(2)



第8図 SD101平面図他(3)



第9図 SD101平面図他(4)

A区の西側、12～14～18～22区のIV層上面で検出された。走向は15～19区から12～20区まではN-71°W、それ以西はN-30°EとなるL字状の落込みである。幅400cm前後、深さ28cmで長さ25.9mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。覆土は2層で下層に炭化物を含んでいる。遺物は江戸時代のものとみられる陶器が2点出土している。

SX104落込み(第10図 図版6)

A区内、12～13～16～17区のIV層下面で検出された。東西618cm、南北526cm以上を測る不整形の落込みで、深さ18～23cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は5層で焼土粒や炭化物を含む。遺物は、西側隅の方より土師器の壺や甕が7点出土している。

SD101 第8回

- 1 : 10YR 3 / 4 黒褐色シルト(同4 / 6 暗褐色シルト若干量と炭化物を含む。)
2 : 10YR 3 / 2 黒褐色粘土質シルト(7.5YR 3 / 3 暗褐色シルトと炭化物を含む。)
3a : 10YR 2 / 2 黑褐色砂質シルト(7.5YR 4 / 6 暗褐色砂質シルトと炭化物を含む。)
3b : 10YR 2 / 2 黑褐色粘土(7.5YR 3 / 4 暗褐色シルトと炭化物を含む。)
4 : 10YR 3 / 1 黑褐色粘土(7.5YR 4 / 6 暗褐色土と炭化物を含む。)

SD104(106) 第9回

- 1a : 10YR 4 / 3 において黄褐色シルト質粘土(大粒の炭化物を多量含む。)
1 : 10YR 2 / 4 暗褐色シルト(同色の粗砂のブロックを多量含む。)
3a : 2.5Y 3 / 3 線キーブルド陶器(2の小ブロックを多量、炭化物を若干含む。)
3b : 10YR 4 / 3 において黄褐色砂質シルト(炭化鉄が多量付着する。)
3c : 10YR 4 / 2 区井陶器砂質シルト(同3 / 4 暗褐色粗砂の大ブロックを含む。)
3d : 10YR 3 / 3 暗褐色砂質シルト(粗粒な炭化物を若干含む。)
3e : 10YR 3 / 4 暗褐色粗砂(純粹。)
4 : 10YR 3 / 1 黑褐色粘土(炭化物を若干含む。)

SK104 第10回

- 1 : 10YR 4 / 4 暗褐色土質シルト(5YR 4 / 8 暗褐色シルト粒・炭化鉄が付着し・焼土粒、炭化物を含む。)
2 : 10YR 2 / 2 黑褐色シルト質粘土(5と2の炭化粗砂を多量、焼土粒を若干含む。1の小ブロックも含む。)
3 : 10YR 3 / 3 粗砂質粘土(礫灰岩の小礫を多量含む。)
4 : 10YR 2 / 1 黑褐色砂質粘土(細灰岩の小礫を含む。)
5 : 10YR 4 / 3 において黄褐色粗砂(炭化鉄が付着する。)

SK105 第10回

- 1 : 10YR 4 / 4 黑褐色シルト(炭化物を含み、層度は10YR 1.7 / 1 黒褐色シルト質粘土の層度。)
2 : 10YR 3 / 4 暗褐色砂質シルト

SD105 第10回

- 1 : 10YR 2 / 1 黑褐色砂質粘土(同4 / 3 において黄褐色シルトブロックを斑状に含む。)
2 : 10YR 3 / 1 オリーブ色シルト質粘土(グレイ化。10YR 4 / 3 黑褐色シルト質粘土と炭化物を含む。)
3 : N/Z 黑褐色シルト質粘土(グレイ化・炭化物を多量含む。)
4 : 2.5Y 3 / 1 黑褐色砂質粘土(グレイ化)
5 : 10YR 4 / 1 黑褐色粘土(グレイ化。ほぼ純粹。)

SD106 第10回

- 1 : 10YR 3 / 3 暗褐色粘土質シルト(7.5YR 2 / 2 暗褐色砂質粘土を帶状に含む。)
2 : 10YR 4 / 3 において黄褐色粘土(同2 / 2 黑褐色粘土が斑状に混り合う。)

SD109 第10回

- 1 : 10YR 3 / 3 暗褐色粘土質シルト(5YR 2 / 3 暗褐色砂質粘土粒を蘿附り状に含む。炭化鉄が付着する。)
2 : 10YR 3 / 4 暗褐色シルト質粘土(炭化鉄が多量付着する。)

SD110 第10回

- 1 : 10YR 3 / 3 暗褐色粘土質シルト(粗砂を若干含むが、ほぼ純粹。)
2 : 7.5YR 3 / 2 黑褐色シルト質粘土(炭化鉄、粗砂を若干含む。)

SD111 第10回

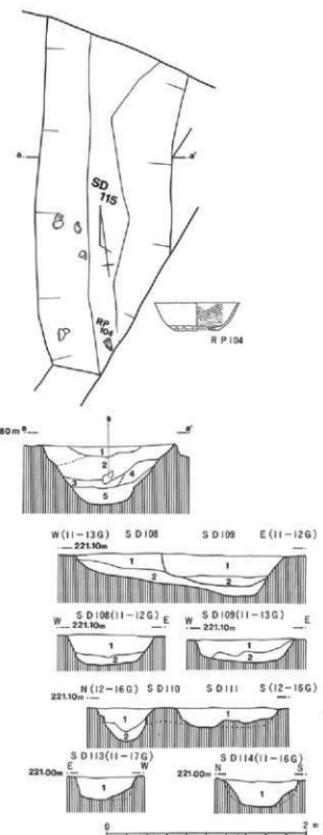
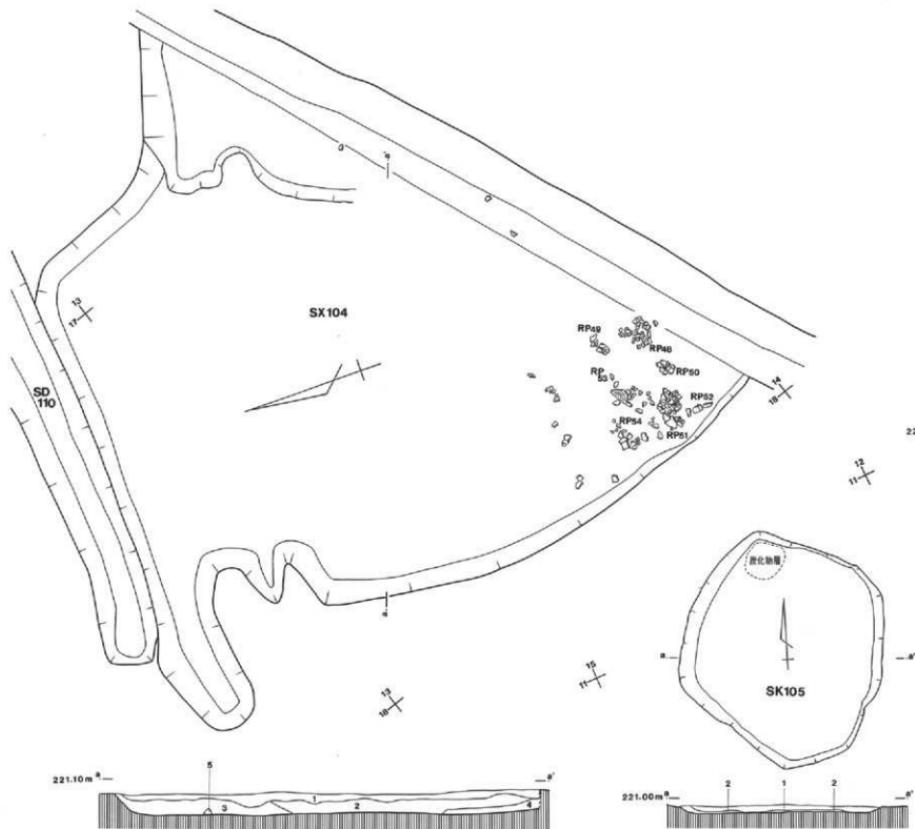
- 1 : 10YR 3 / 4 暗褐色粘土質シルト(純粹)

SD112 第10回

- 1 : 10YR 3 / 4 暗褐色粘土質シルト

SD114 第10回

- 1 : 10YR 3 / 4 暗褐色粘土質シルト



第10図 S X 104、S K 105他平面・断面図

2 遺 物

A区ではSD101(106)、115、SX114等からまとまった遺物が出土したが、それ以外の遺構からは僅かな遺物が出土するにとどまった。遺構検出作業中に出土した遺物も整理箱にして1箱分程度と少なかった。以下に、遺構ごとにその概要を記す。なお、遺物は土師器と須恵器、赤焼土器、それに近世陶器に限られる。

SD101(106)の土器(第11~13図 図版10~12)

土師器の壺で図示可能なものは6個体出土した。いずれもロクロは使われていない。1は14~19区内と13~19区内の3b、3a層から出土したものが接合した土器で、体部下半に浅い沈線をもつ。外面の沈線から上はヨコナデが施され、沈線から下位は全面に手持ちヘラケズリが施される。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。2は明瞭な沈線をもたない丸底の壺である。体部にはヨコナデ、下半部から底部にかけてはヘラケズリ調整が認められる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。3は立上がりが急な壺で、外面の上部にはヘラミガキが、底部にはヘラミガキ、ヘラケズリが併用されている。4は内外面とも剥落が著しく調整は不明である。5、6は1~4より大きな壺状の形態となる壺である。5は底部を、6は体部上半を欠くが、法量、調整技法とも共通する。外面にヘラケズリ調整が施された平底ふうの底部から急角度で立上る。体部外面はヘラナデとヘラミガキが、口縁部には丁寧なヘラミガキが施されている。内面はヘラミガキの後、黒色処理が施される。

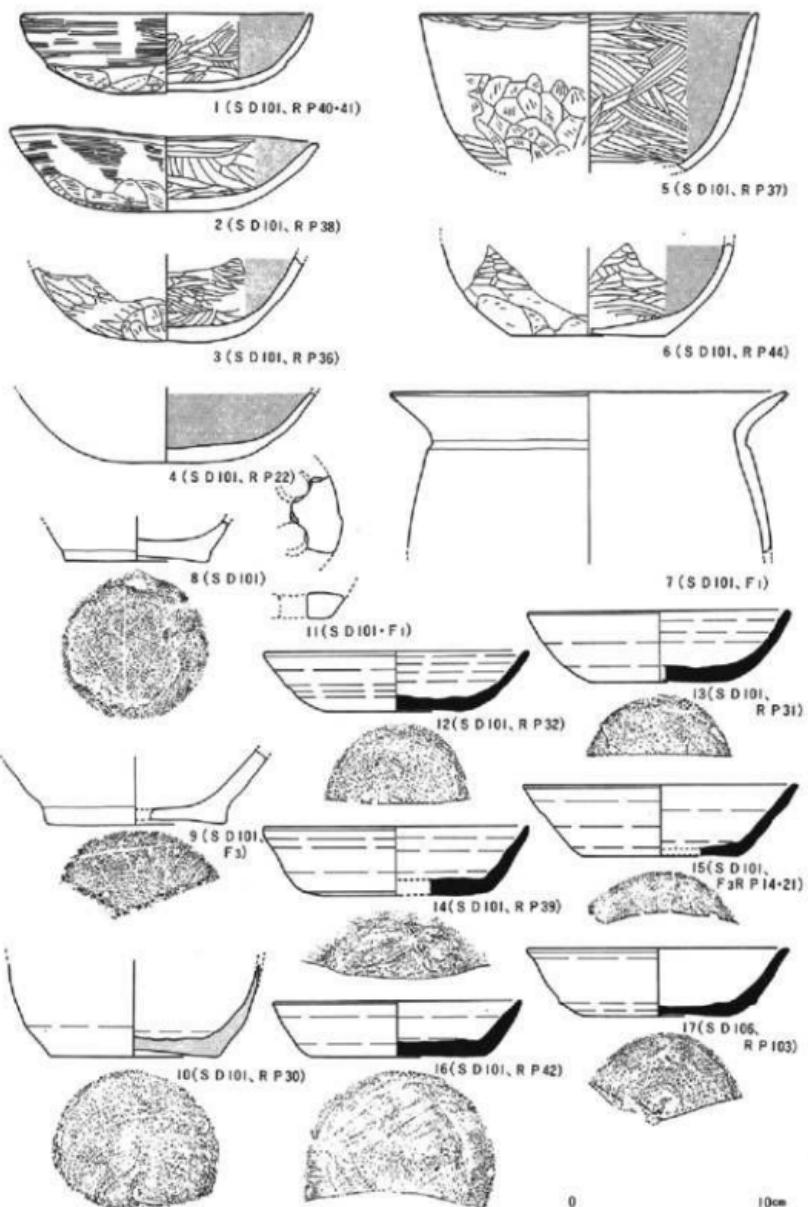
土師器壺の破片は多いが、細片が多く、器面の荒れも著しい。7は頸部に浅い沈線をもつ壺であるが器面の荒れが著しいため調整は不明である。8、9は底部に木葉痕をもつ壺である。

11は土師器の壺の底部破片である。多孔式の壺で現存する範囲内で径13mm程の孔が2個観察される。

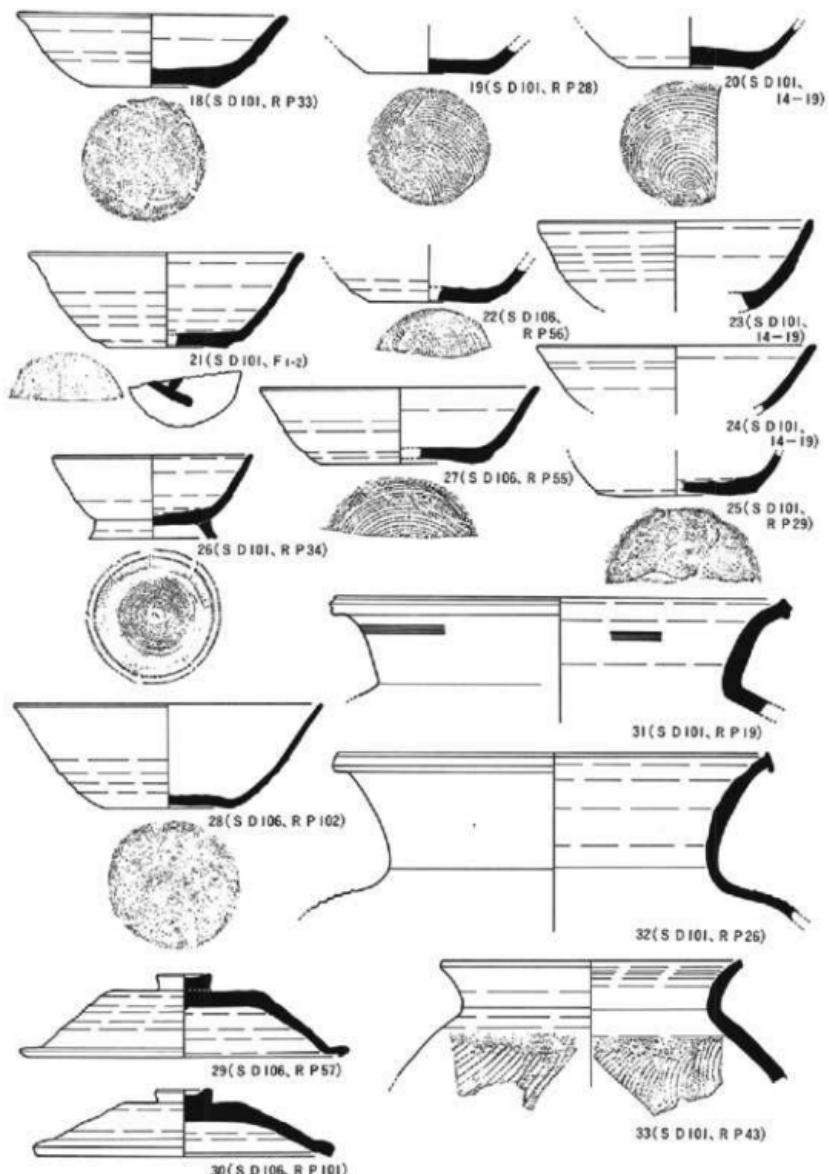
10は底部が回転糸切りによって切り離された赤焼土器の壺である。堆積土1層の出土。

須恵器には蓋、壺、高台付壺、壺がある。蓋はSD106として登録した東部から2点の出土がある。29は器高が高く、ロクロからの切り離しは回転糸切りである。色調は赤褐色を呈する。30は天井部外面に回転ヘラケズリ調整が施されている。両者とも中央が窪むつまみがつけられている。

壺で図示可能なものは16個体であった。14、16は大きな底部から直線的に立上り、そのまま口縁部に至る。底部外面には粗い手持ちヘラケズリが施されており、ロクロからの切り離しは不明である。両者とも堆積土の3b層から出土している。12、13、15、17、25は回転ヘラ切り無調整の壺である。15は直線的に立上ってそのまま外傾するが、これ以外は丸

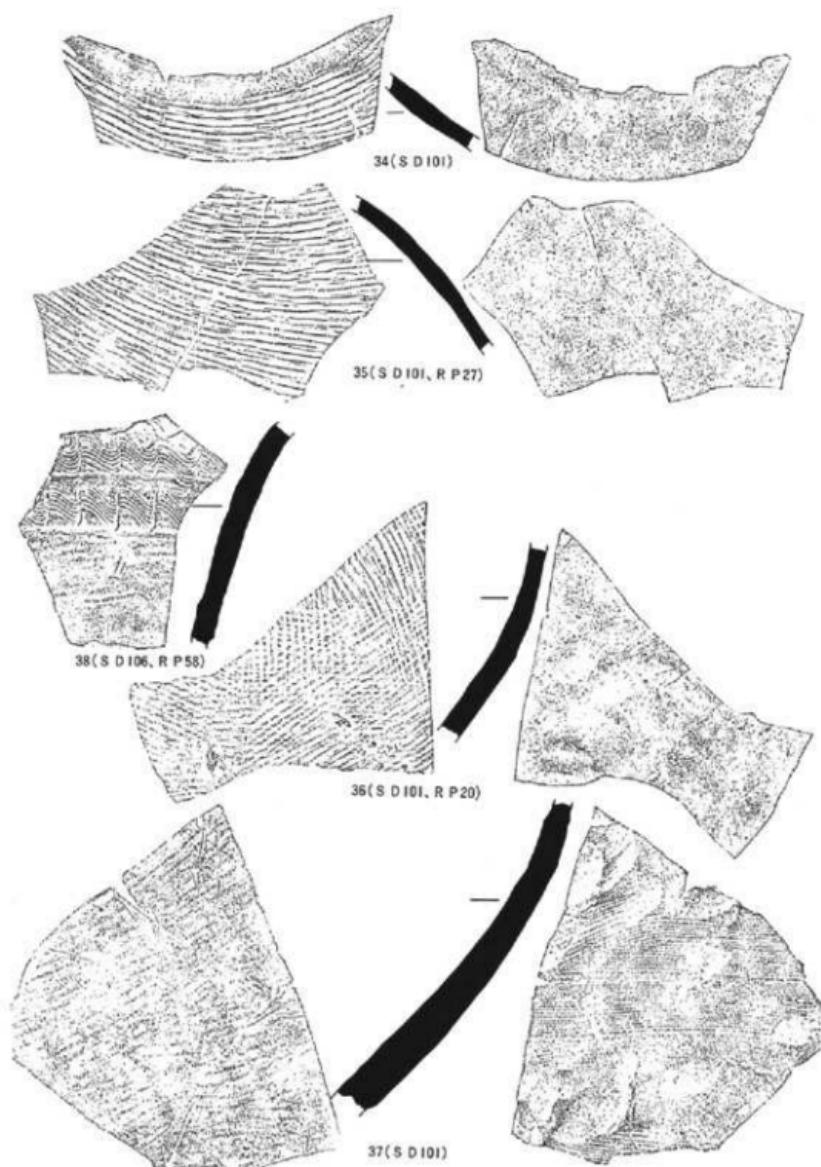


第11図 A区出土遺物(1)



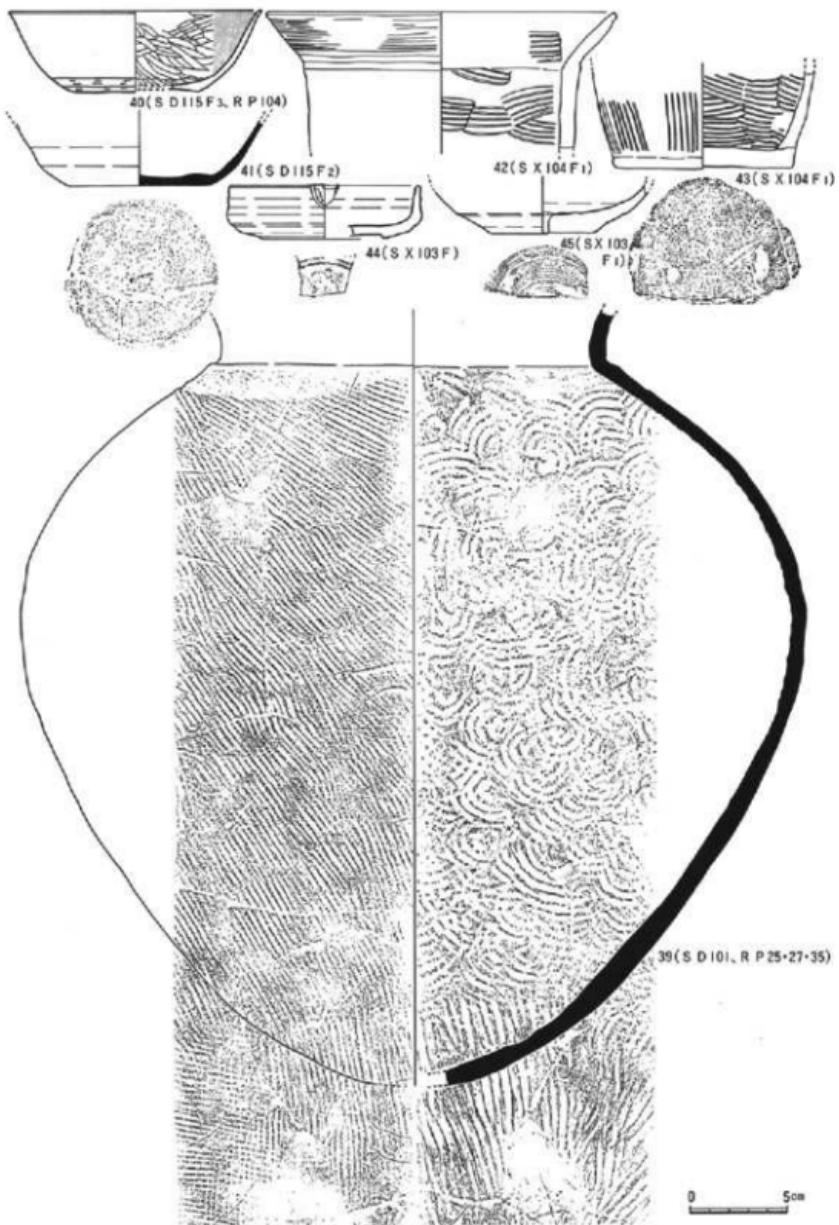
0 10cm

第12図 A区出土遺物(2)



0 10 m

第13図 A区出土遺物(3)



第14図 A区出土遺物(4)

味をもって立上る形態となる。これらの壺は堆積土の1層、2層、3層にまたがって出土している。18~22、27、28は回転糸切り無調整の壺である。このなかで底部から口縁まで残存するものは4個体であり、それぞれが法量や器形に相異が認められる。18は底形が小さく、身も浅い。21は底径が小さいが身は深い。27は底径が80mmを測り、器高、口径ともヘラ切りの壺に近い数値をもっている。28は口径、器高とも最も大きい。糸切りの壺は堆積土の1層ないしは2層に限られており、3層からの出土はない。

高台付壺は1点だけの出土である。26はヘラ切りの小形の壺に「ハ」の字形に開く高い高台がつけられている。堆積土1層からの出土である。

壺は最低でも8個体の出土がある。39は頸部から底部までほぼその全容を知り得る。器高は40cm以上、体部上半にある最大径は40cm、頸部径は20cmを測る。やや尖った丸底となり、体部外面には格子目ふうのタタキが、内面は同心円アテとなり、底部付近は平行アテとなる。31、32は頸部径が18.5cm、17cmとなり、39よりひと回り小形である。31の口唇部は肥厚し、口唇中央に一条の凸帯が巡っている。32の口唇部は端部が上方と下方につまみ出されている。32の外面には平行タタキが認められる。33は頸部径が13cmの小形の壺で口頸部のくびれは強くない。体部外面に格子目ふうタタキ、内面に青海波アテが認められる。34、35は体部上半の破片資料で同一個体である。外面は平行タタキ、内面は無文アテとなっている。36、37は体部下半の資料で平行タタキ、無文アテ、平行タタキ、無文アテ、カキメが施されている。38は口頸部破片で太い沈線の波状文の下に7条からなる2段の波状文が施されている。37、38は大形の壺である。

SD115の土器(第14図 図版11)

調査区の東端にあるSD115からは2点の図示可能な土器が出土した。40は土師器壺である。ロクロ整形であり、平底となる。体部下端と底部外面に回転ヘラケズリが施されており、ロクロからの切離しについては不明である。内面にはヘラミガキが施され、黒色処理されている。41は須恵器壺である。ロクロからの切離しはヘラ切りで、再調整は認められない。

SX104の土器(第15図)

SX104では7個体の土器を登録した。いずれも土師器の壺であるが脆く、風化が著しいため図化できたのは2個体に止った。42は口縁から体部上半の資料で「く」の字状に単純に外反する。口頸部外面にはヨコナデ、内面には横方向の刷毛目が観察される。43は底部資料である。外面は継、内面は横方向の刷毛目が施され、底部には木葉痕が認められる。

SX103の陶器(第15図)

44、45はSX103から出土した近世陶器である。唐津系のものと考えられる。

VI B区の遺構と遺物

1 遺 構

(1) 溝 跡

SD201溝跡(第4、15図 図版3、7)

B区内、14~15~25~26区のIII層上面で検出された。走向はN-71°-Eである。幅148~250cm、確認面からの深さ65~81cm、調査区内での長さ55mを測る。断面形はV字状で底面は若干の凹凸がある。覆土は大きく6層に分かれる。遺物は石窓や刀子、そして最下層より奈良時代の高环が出土した。この溝跡はA区のSD101溝跡とC区のSD301溝跡に連続すると考えられる。

SD202溝跡(第4、15図 図版3、7)

14~15~29~30区のIII層上面で検出された。走向はN-78°-Eである。幅55~120cm、確認面からの深さ22~43cmで調査区内での長さ53mを測る。断面形はU字状、底面は平坦である。覆土は4層に分かれる。遺物は土器片が出土した。この溝跡はA区のSD102溝跡とC区のSD312溝跡に連続すると考えられる。

SD203溝跡(第3、4図 図版3)

13~15~29~30区のIII層上面で検出された。走向はN-9°-Eである。幅56~91cm、確認面からの深さ24~31cm、調査区内での長さは13.1mを測る。断面形はU字状、底面は平坦である。覆土は2層で遺物は古墳時代の土師器壺や壺等が出土した。

SD207溝跡(第4図 図版3)

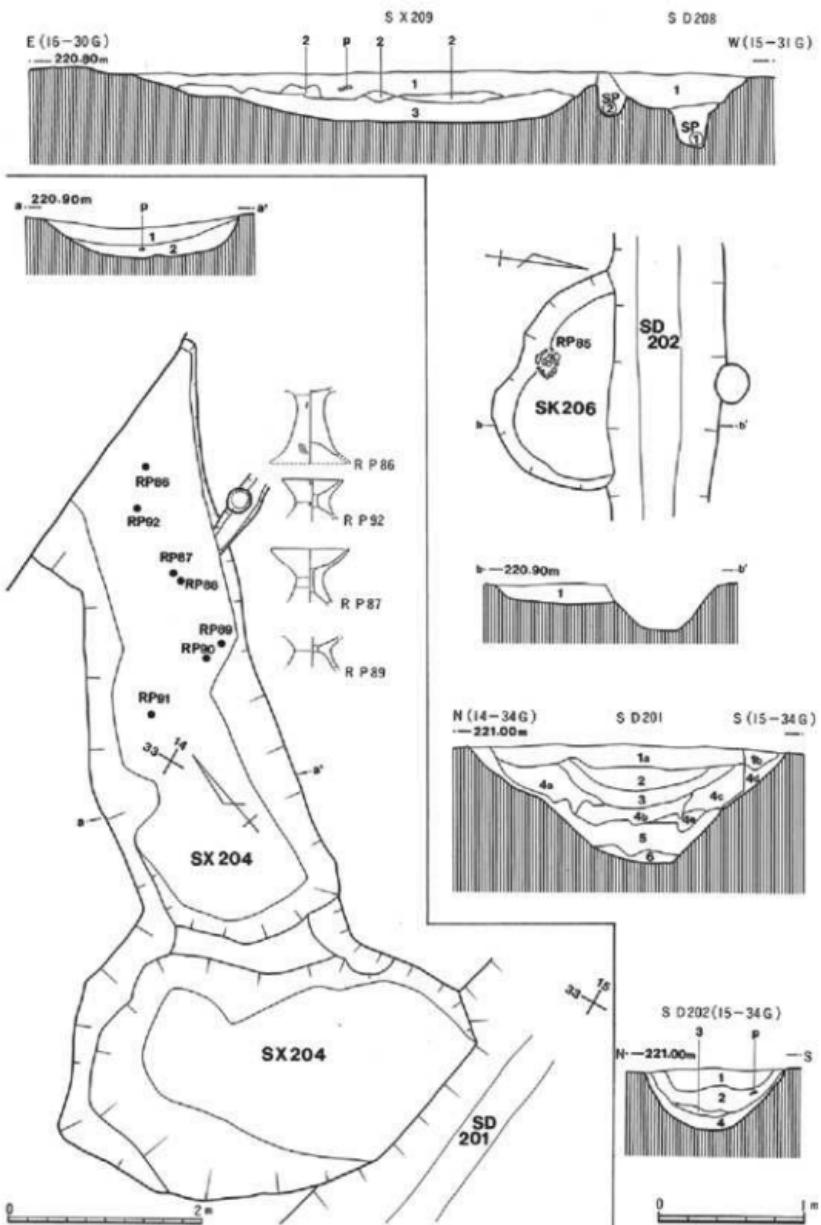
13~16~30~31区のIII層上面で検出された。走向はN-6°-Eである。幅70~120cm、確認面からの深さ26~29cm、調査区内での長さは16.1mを測る。断面形はU字状、底面は平坦、覆土は1層である。

SD208溝跡(第4図 図版3)

15~16~30~31区のIV層で検出された。走向はN-27°-Eである。幅71~92cm、確認面からの深さ23cm、調査区内での長さは7.7mを測る。断面形はV字状、底面は若干の凹凸があり、覆土は1層である。

(2) 柱 列(第4図 図版8)

掘り方は一定の間隔で並ぶが、掘立柱建物跡として把握できないものを柱列とした。柱間が3間以上となるものは15~33~34区で検出した1ヶ所だけである。柱穴は南側からSP213、SP214、SP215、SP216として登録した。柱間は3間で、主軸はN-20°-Eを測る。掘り方の中心で測った柱間距離はSP213~SP215は1.80mで、SP215~SP216は1.35mである。



第15図 SX 204, SK 206平面・断面図他

各掘り方の規模は以下のとおりである。

SP213－東西30×南北30cm。深さ62cm。

SP214－東西34×南北33cm。深さ26cm。やや東側にズレている。

SP215－東西40×南北36cm。深さ24cm。

SP216－東西22×南北27cm。深さ42cm。一辺10cm程度の柱根が遺存している。

(3) 土 壤

SK206土壌(第15図 図版7)

15-32区のIII層上面で検出された。北側をSD202溝跡に切られる。東西148cm、南北80cm以上で確認面からの深さは14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は1層で、遺物は古墳時代の土師器环が1点出土した。

(4) 落 込 み

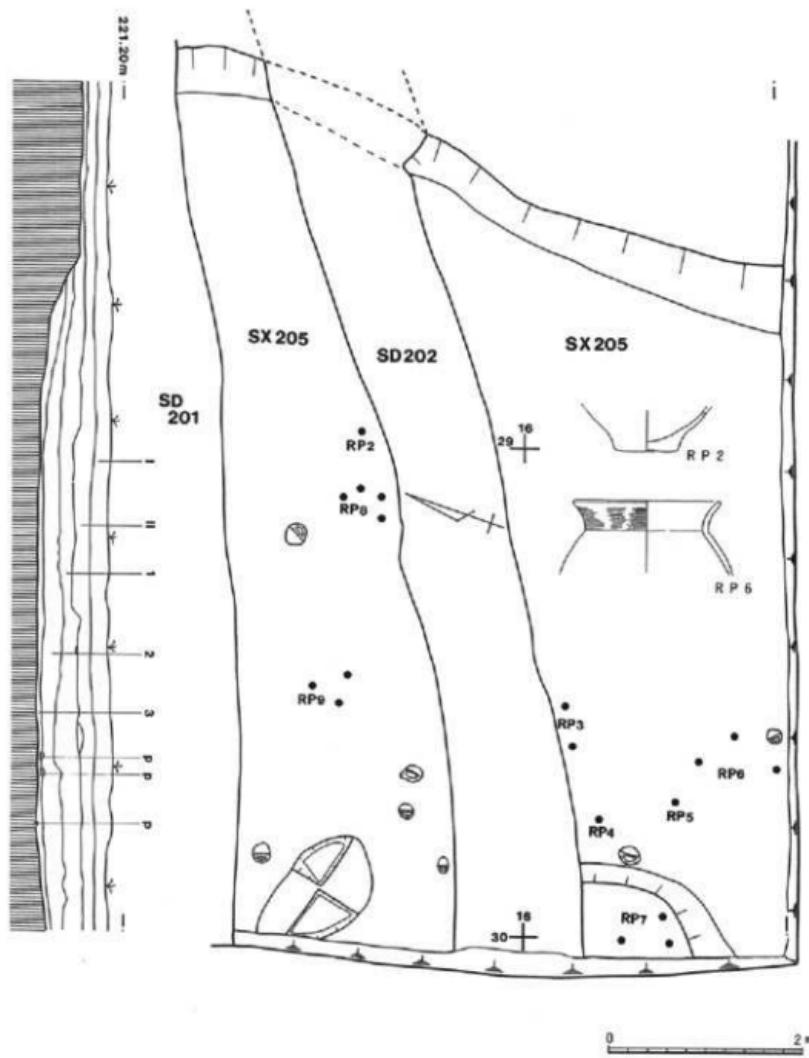
SX204落込み(第15図 図版3、8)

B区の北西側、13~14-32~33区のIII層上面で検出された。長軸770cm、短軸160cmの不整形をしている。確認面からの深さは38~45cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があり、覆土は2層である。遺物は古墳時代の土師器の高杯、甕、器台など7点が出土した。

SX205落込み(第16図)

15~16-28~30区のIII層上面で検出された。東西9.2m、南北6.3m以上で、台形状のプランをもつ。確認面からの深さ38~45cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦

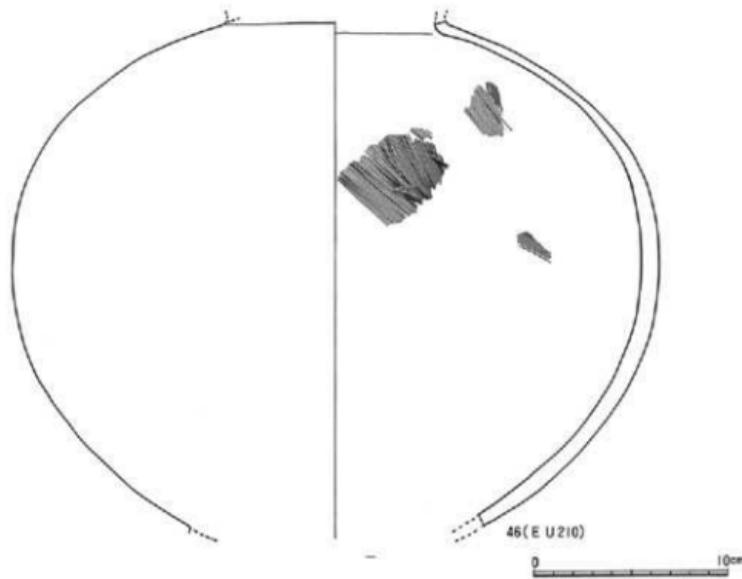
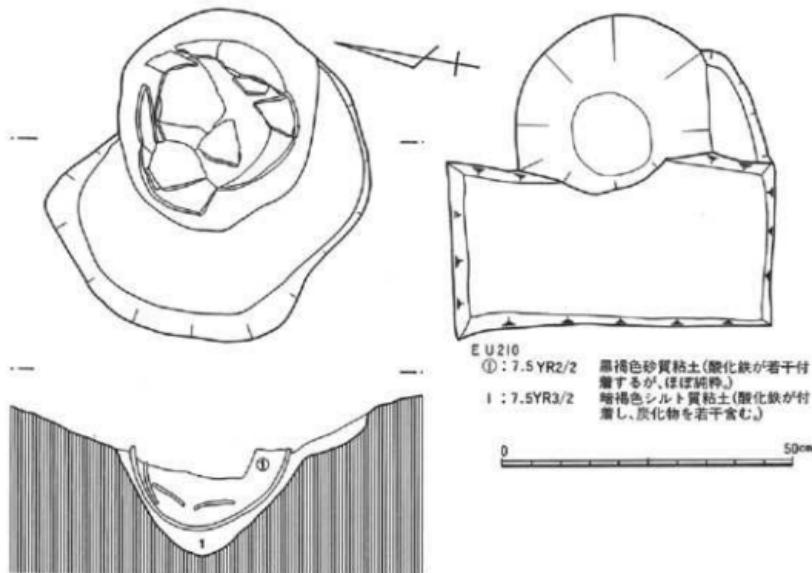
SD206 第15図	
1 : 10YR 3/4	暗褐色シルト(同4/4 暗色砂質シルトの大ブロックを斑状に含み、炭化物も若干含む。)
SP	
① : 7.SYR 3/2	黒褐色粘土(同4/4 暗褐色砂の小ブロックを若干含み。しまりなく、やわらかい。)
② : 7.SYR 3/3	暗褐色シルト質粘土(炭化物を若干含む。)
SX209 第15図	
1 : 10YR 3/4	暗褐色砂質シルト(同4/4 暗色粘土と7.SYR 5/8 明褐色粘土を斑状に含み、炭化物を混む。)
2 : 10YR 3/3	暗褐色シルト質粘土(7.SYR 5/8 暗褐色シルトを若干含み、微細な炭化物も含む。)
3 : 7.SYR 3/2	暗褐色シルト質粘土(比較的硬質)
SX204 第15図	
1 : 10YR 4/4	褐色シルト質砂(7.SYR 3/4 暗褐色シルトの細粒を霜降り状に含む。)
2 : 10YR 2/2	褐褐色シルト質粘土(7.SYR 3/4 暗褐色シルトと炭化物、土器を含む。難化鐵が付着。)
SK206 第15図	
1 : 10YR 2/2	黒褐色粘土(同4/4 暗褐色シルト質砂と7.SYR 3/4 暗褐色シルトを含む。)
SD201 第15図	
1 a : 10YR 3/4	暗褐色シルト(7.SYR 5/8 明褐色シルト、炭化物を含む。)
1 b : 10YR 3/3	暗褐色シルト(炭化物、難化鐵を含む。)
2 : 10YR 3/2	黒褐色粘土質シルト(7.SYR 4/6 暗褐色シルト、炭化物を含む。)
3 : 10YR 3/1	黒褐色粘土(7.SYR 4/6 暗褐色シルト、7.SYR 3/4 暗褐色シルト、炭化物を含む。)
4 a : 10YR 3/3	暗褐色シルト(7.SYR 3/4 暗褐色シルトを含む。)
4 b : 10YR 2/2	黒褐色粘土(10YR 4/6 暗褐色シルトと炭化物を含む。)
4 c : 10YR 2/3	黒褐色粘土質シルト(7.SYR 3/3 暗褐色シルトと10YR 4/6 暗褐色シルトを少々含む。)
4 d : 10YR 3/4	暗褐色粘土質シルト(10YR 4/6 暗褐色シルトを含む。)
4 e : 10YR 2/2	暗褐色粘土質シルト(7.SYR 3/4 暗褐色シルト、10YR 4/6 暗褐色シルトを含む。)
5 : 10YR 2/2	黒褐色粘土(7.SYR 3/4 暗褐色シルト、砂、炭化物を含む。)
6 : 10YR 2/1	黒褐色粘土(7.SYR 3/4 暗褐色シルト、砂を含む。)
SD202 第15図	
1 : 10YR 3/4	暗褐色シルト(10YR 4/6 暗褐色シルトを少々含む。)
2 : 10YR 3/2	黒褐色粘土質シルト(10YR 4/6 暗褐色シルト少々と炭化物、土器を含む。)
3 : 10YR 2/3	黒褐色粘土質シルト(7.5YR 3/4 暗褐色シルト少々含む。)
4 : 10YR 3/2	黒褐色粘土(7.SYR 3/4 暗褐色シルトと鐵を含む。)



S X 205

- 1 : 10 YR4/4 暗褐色シルト (礫・炭化物・粗砂を含む。)
- 2 : 10 YR4/6 粘土質シルト (炭化物を含む。)
- 1 : 7.SYR3/3 喀褐色砂質シルト (7.SYR4/4褐色砂質シルト、炭化物を少々含む。)
- 2 : 10 YR3/4 喀褐色粘土質シルト (7.SYR4/6褐色砂質シルト、SYR4/8喀褐色粘土質シルトを含む。)
- 3 : 10 YR3/1 黑褐色粘土質シルト (SYR4/8赤褐色砂質シルト、炭化物を含む。)

第16図 S X 205平面・断面図



第17図 E U210と出土土器

で、覆土は3層に分かれる。遺物は古墳時代の土師器の壺など8点出土した。

SX209落込み(第4図 図版3)

15~16~30区のIV層で検出された。東西2.3m、南北3.3mで不整形のプランをもつ。確認面からの深さ15~34cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、覆土は3層に分かれる。

(5) 埋設土器

EU210(第17図 図版8)

16~31区のIV層で検出された。ピットはほぼ円形の平面形をもち、径34×38cm、深さ18cmで、覆土は1層、埋設されていたのは古墳時代前期の土師器壺が1個体であった。

2 遺 物

B区ではSX204、205から古墳時代前期の遺物がややまとまって出土したが、それ以外の遺構では少なかった。

SD201の遺物(第18図 図版11)

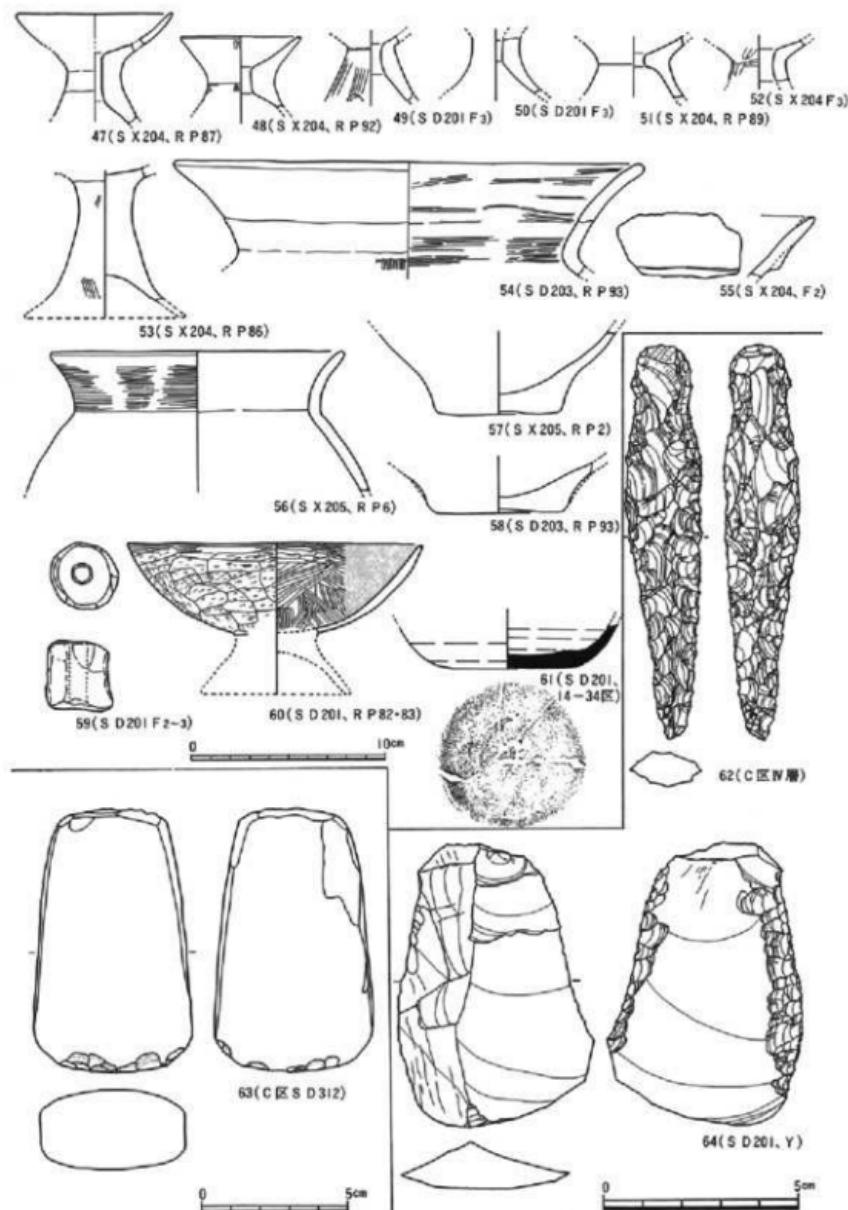
SD201はA区のSD101、C区のSD301と連続するものと考えられるがB区内では遺物がきわめて少なかった。60は底面から出土した土師器の高环の坏部である。坏部の外面にはヘラケズリが施され、口縁部はヨコナデとなる。内面は細かなヘラミガキが施された後、黒色処理が行われている。61はヘラ切り無調整の須恵器坏である。49、50は堆積土の3層から出土した器台である。両者とも受け部、脚部間は貫通しており、49には円窓が認められる。貫通孔の径は49で10mm、50で7mmを測る。59は管玉に擬したとみられる土玉で全長33mm、径31mmで中央の貫通孔は8mmを測る。64は底面から出土した削器である。図版12の86は堆積土1層から出土した刀子である。現存長231mm、最大幅28mmを測る。

SD203の土器(第18図 図版11)

図示可能なものは2点の土師器である。55は壺の口頸部資料、内面にヨコナデ、外面の体部にかかる部分に細かな刷毛目が観察される。58は壺または壺の底部資料である。

SX204の土器(第18図 図版11)

本遺構から出土した土器はすべて古墳時代の土器である。器台、高环、壺、壺の各器種があるが、壺、壺は細片となっており、復元できるものはなかった。器台で実測できたものは4点あるが、いずれも部分資料でかつ器面の荒れが著しい。47は口径80mmの小皿状の受け部をもつと推定され、48は口径62mmの小皿状の受け部をもつ。受け部と脚部間はいずれも貫通しており、貫通孔の径は47が7mm、48が10mm、51が11mm、52が14mmを測る。48、52には部分的であるが、ミガキ調整が観察される。53は高环の脚部であろう。55は複合口縁の壺の破片資料である。



第18図 B区出土土器・土製品、B・C区出土石器

SX205の土器(第18図 図版11)

本遺構では9個体のまとまった土器を確認して登録したが、そのなかで図示可能な状態まで復元できたものは56、57の2個体の壺もしくは壺だけである。

EU210埋設土器(第17図 図版11)

埋設土器は1個体である。球形の体部をもつ壺で口頸部と底部を欠く。最大径は体部の中央にあり、333mmを測る。器面の荒れが著しいが、内面には細かな刷毛目が認められる。

VII C区の遺構と遺物

1 遺 構

(1) 堀立柱建物跡

C区において堀立柱建物跡として確認できたのは、SB310とSB311の2棟である。しかし、調査区の関係から、その全体を明らかにすることはできなかった。

SB310(第19図 図版4、9)

C区の西側、12~13~40区のIV層上面で検出した。SD301、SX309を切っている。建物の規模は不明であるが、南北棟とすると主軸方向はN-21°-Eを測る。調査区内の大きさは南北4.70m、東西2.00m以上となる。柱間の距離は東面のEB 1・2間で2.30m、EB 2・3間で2.40m、北面のEB 3とSP306間で2.00mを測る。EB 1とEB 2は、径20cm程のアリが確認されたが、掘り方の底面まで達していない為に柱痕跡と断定することはできなかった。掘り方の規模は、EB 1は東西35cm、南北35cm、円形プランで深さ39cm。堆積土は4層。EB 2は東西37cm、南北41cm、不整円形のプランで深さ41cm。堆積土は3層。EB 3は東西34cm、南北38cm、梢円形のプランで深さ28cm。堆積土は3層。SP306は東西41cm、南北35cm、不整円形のプランで深さ34cmを測る。

SB311(第19図 図版4、9)

C区の北側、13~39~40区のIV層上面で検出した東西棟と思われる堀立柱建物跡でSX309を切る。

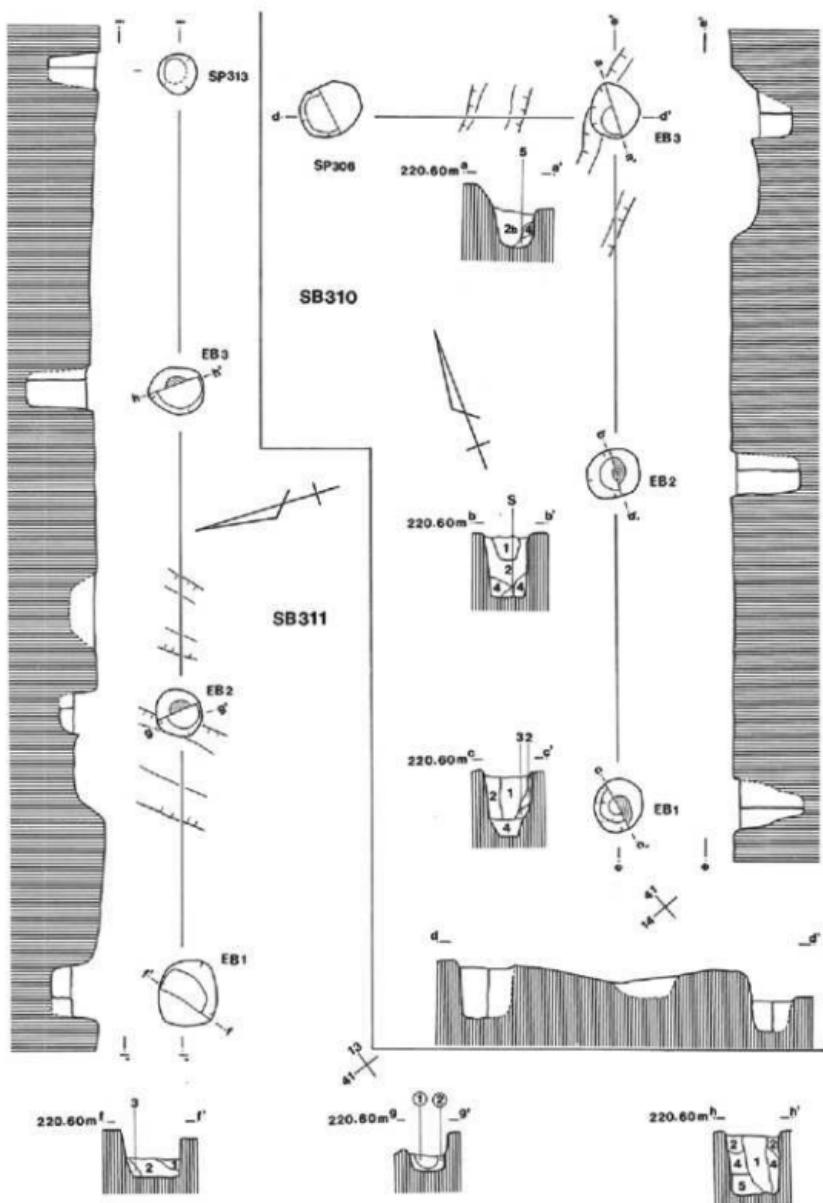
東西棟とすると、桁行は3間、梁行は調査区外で不明。主軸方向はN-73°-Wを測る。調

SB310 第19回

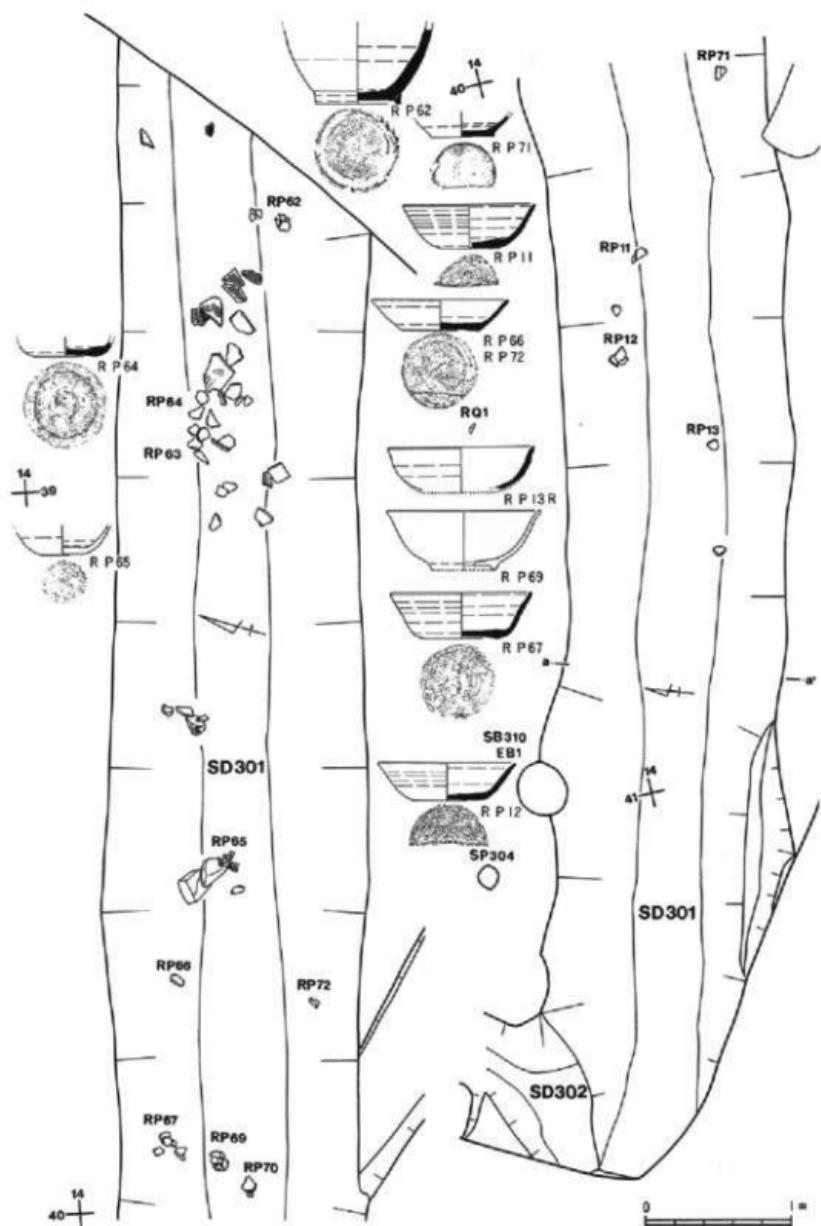
- 1 : 10YR 2/2 黒褐色粘土(同2/2 黑褐色砂質シルト、7.5YR 2/3 黑褐色砂質が塊状に混り合う。)
- 2 : 10YR 2/3 黑褐色砂質粘土(7.5YR 2/1 黑褐色粘土を塊状に含み、灰化物も若干混入する。)
- 2b : 10YR 2/3 黑褐色砂質粘土(5 YR 2/3 黑褐色砂質と灰化物も含み、2よりやや暗い、しまっている。)
- 3 : 10YR 4/3 に付いて黒褐色粘土シルト(同2/3 黑褐色粘土の小粒を多量含み、しまっている。)
- 4 : 10YR 3/4 塗褐色シルト質黒褐色(7.5YR 2/3 黑褐色砂質と灰化物を若干含み、しまっている。)
- 5 : 10YR 4/4 塗褐色砂質粘土/3 黑褐色粘土の小ブロックを若干含み、しまっている。)

SB311 第19回

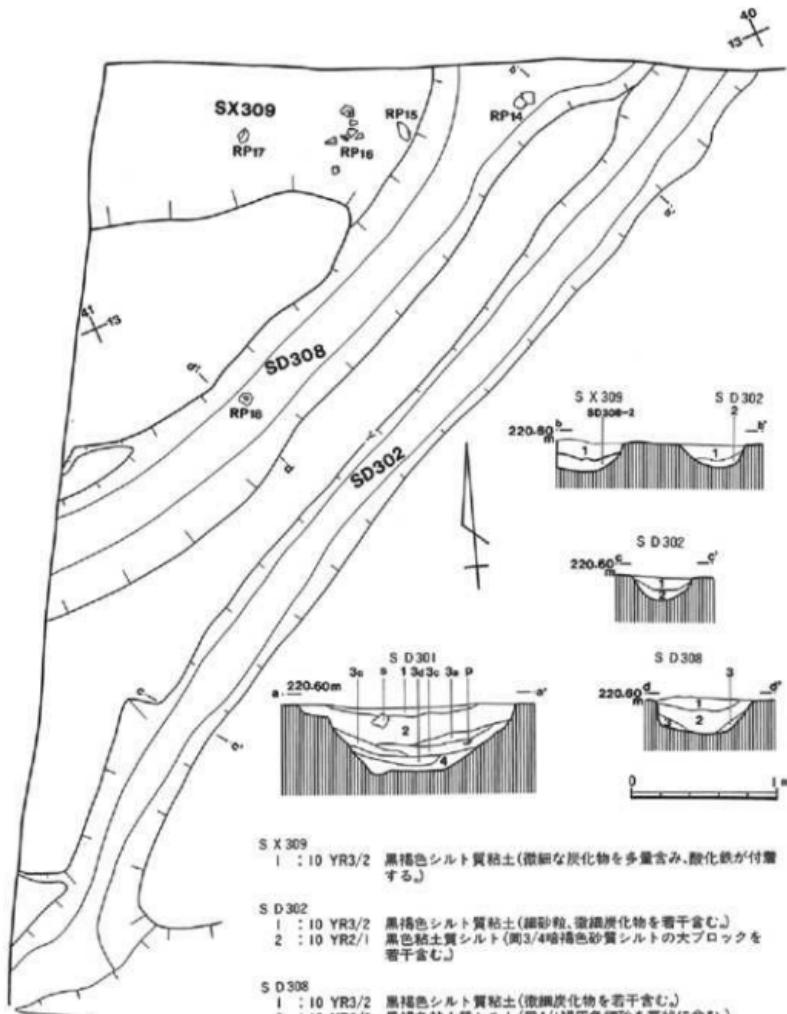
- 1 : 10YR 2/5 黑褐色粘土(同2/1 黑褐色粘土が塊状に混り合っている。)
- 2 : 10YR 2/3 黑褐色粘土(同2/1 黑褐色粘土と同3/4 黑褐色粘土が混り合う。)
- 3 : 10YR 3/2 黑褐色粘土(黒化鉄が多量付着する。)
- 4 : 10YR 3/4 塗褐色シルト質黒褐色(7.5YR 2/3 黑褐色砂質と灰化物を若干含み、しまっている。)
- 5 : 10YR 4/4 塗褐色シルト(同2/3 黑褐色粘土の小ブロックを若干含み、しまっている。)
- ①: 10YR 2/2 黑褐色粘土(同3/3 黑褐色砂質シルト、7.5YR 2/3 黑褐色砂質が塊状に混り合う。)
- ②: 10YR 2/3 黑褐色砂質粘土(7.5YR 3/1 黑褐色粘土を塊状に含み、灰化物も若干混入する。)



第19図 SB310・311平面・断面図



第20図 SD 301平面図



- S D 301**
1 : 10 YR3/2 黒褐色砂質シルト(酸化鉄が多量付着する。大粒の炭化物を若干含む。)
2 : 10 YR2/2 黒褐色粘土質シルト(同1.7/1黒色粘土の小ブロックを多量含み、微細炭化物も若干含む。)
3a : 10 YR2/3 黒褐色粗砂
3b : 10 YR2/1 黒褐色シルト質粘土(同1.7/1黒色粘土の小ブロックを若干含み、微細炭化物を若干含む。よくしまっている。)
3c : 2.5Y 3/1 黒褐色粘土(微細炭化物を若干含む。)
3d : 10 YR2/1 黒褐色細砂(10YR2/3黒褐色粘土のブロックを含む。)
4 : 10 YR2/1 黒褐色砂質シルト(同4/3にぶい黄褐色シルト質細砂の大ブロックと微細炭化物も含む。)

第21図 S D 302・308、S X 309平面・断面図他

査区内での大きさは東西のみ6.35mである。柱間の距離は、南面のEB 1・2間で200cm、EB 2・3間で220cm、EB 3とSP313間で215cmを測る。又、EB 2とEB 3に径15cm程のアタリが確認された。EB 2は掘り方の底面まで達していない為に柱痕跡と断定できないが、EB 3の方は柱痕跡で、径10cm前後の丸柱であったと思われる。掘り方の規模は、EB 1が東西44cm、南北40cm、不整円形のプランで深さ34cm、堆積土は3層。EB 2は東西34cm、南北32cm、円形のプランで深さ26cm、堆積土は2層。EB 3は東西33cm、南北38cm、橢円形のプランで深さ38cmで堆積土は4層。SP313は東西27cm、南北27cm、円形のプランで深さ34cmを測る。

(2) 溝 跡

SD301溝跡(第20図 図版4、9)

C区内、13~14~38~41区のIV層上面で検出された。走向はN-76°-Eである。幅150~180cm、確認面からの深さ41~51cm、調査区内での長さ15.8mを測る。覆土は、大きく4層に分かれ、断面形はV字状、底面は平坦だが若干の窪みがある。遺物は1・2層から奈良時代~平安時代の須恵器壺や壺、甕、赤焼土器の壺等13点が出土した。この溝跡はA区のSD101溝跡、B区のSD201溝跡の連続と考えられる。

SD302溝跡(第21図 図版4)

C区の西側、13~40~41区のIV層上面で検出された。走向はN-42°-Eである。幅40~48cm、確認面からの深さ15cm、調査区内での長さ7.70mを測る。覆土は2層、断面形はU字状で底面は窪んでいる。

SD303溝跡(第21図 図版4)

C区の南東側、14~15~39区内のIV層で検出された。走向はN-81°-Wである。幅55~90cm、確認面からの深さ13~20cm、調査区内での長さ2.95mを測る。覆土は1層で断面形はU字状で底面は凹凸がある。

SD308溝跡(第21図 図版4)

C区の北西側、12~13~40区のIV層上面で検出された。走向はN-44°-Eである。幅56~70cm、確認面からの深さ20~24cm、調査区内での長さ4.65mを測る。覆土は3層、断面形はV字状で底面はほぼ平坦である。遺物は土師器甕の底部が出土した。

SD312溝跡(第5図 図版4)

C区の南東側、14~38~40区のIV層上面から検出された。走向はN-73°-Eである。幅60~90cm、確認面からの深さ21cm、調査区内での長さ8.80mを測る。覆土は2層、断面形はV字状で底面は窪んでいる。遺物は流入したと考えられる石斧が出土した。この溝跡はB区のSD202溝跡、A区のSD102溝跡と連続すると考えられる。

(3) 落込み

SX309落込み(第21図 図版4)

C区の北西側、12-40区のIII層で検出された。SB310、311に切られる。長軸長3.25m、短軸長1.14mの不整形のプランをもつ。確認面からの深さ12cm、覆土は1層、緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は須恵器の壺、赤焼土器の甕等が出土した。

2 遺物

C区ではSD301、SX309からまとまった遺物が出土したが、それ以外の遺構では少なかつた。

SD301の土器(第22、23図 図版11、12)

本遺構では現地調査の段階で14個体の土器を登録した。このうちRP70として登録した土師器甕は図化できなかった。

65は土師器の塊である。ロクロ整形で回転糸切りによって切離された後、高台が付けられている。内面は黒色処理が施されているが器面の荒れが著しいため、ミガキは確認できなかった。

66から74は須恵器の壺である。74が糸切りであるが、そのほかはヘラ切りである。70の体部下端には回転ヘラケズリが施されている。ヘラ切り無調整で全容を知り得るものは5点あるが、法量、器形ともバラツキが大きい。66は急角度で立上る身の深い壺で、67、69は丸味をもって立上っている。71、73は身が浅い。75は須恵器甕、78は大形の甕の体部下半の資料で、外面には格子目ふうのタタキが、内面には青海波アテが施されている。

76は底径が45mmの赤焼土器壺である。

SD308の土器(第24図 図版12)

85は焼成後に穿孔された底部をもつ土師器甕である。内面に粗い刷毛目が観察される。

SX309の土器(第24図 図版12)

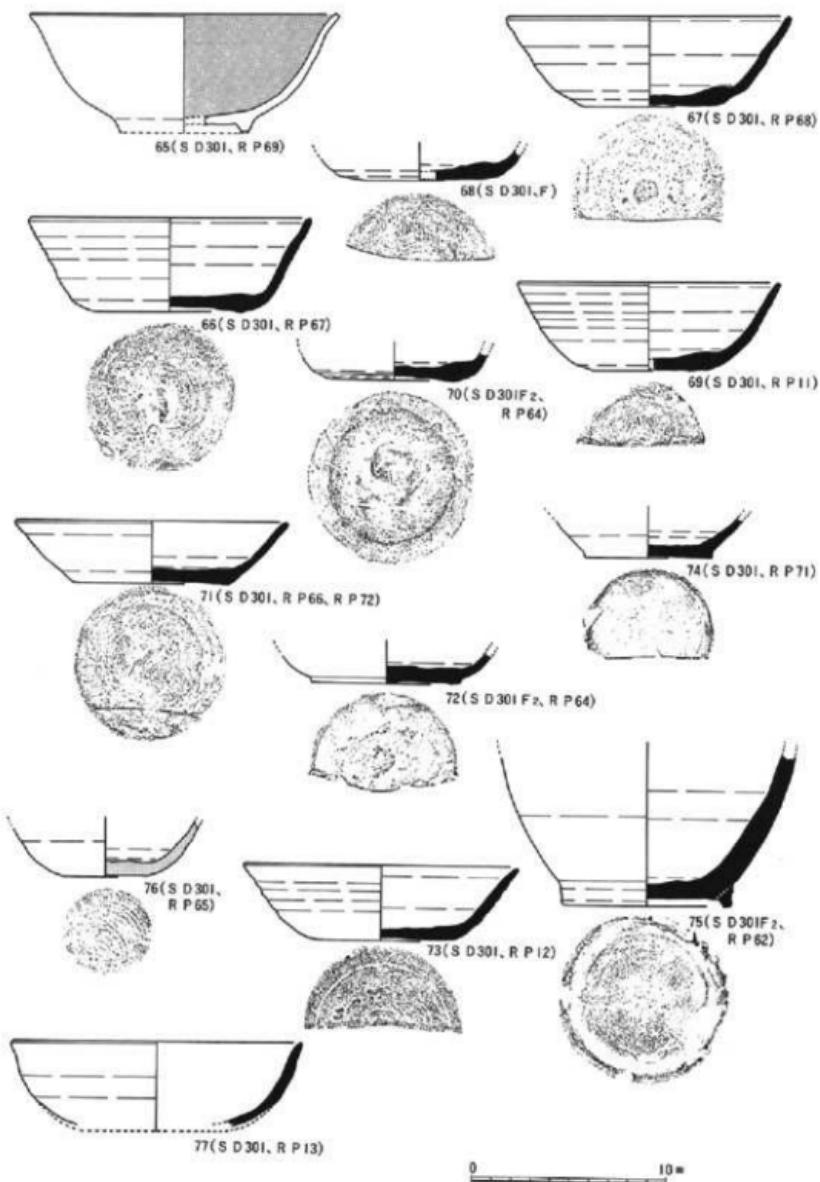
79、83は回転ヘラ切りの須恵器壺で、共にゆるい立上りで身は浅い。80は回転糸切りであるが法量は大きい。82は高台付壺の壺部であろう。

84は回転糸切り痕をもつ赤焼土器の甕である。調整はない。

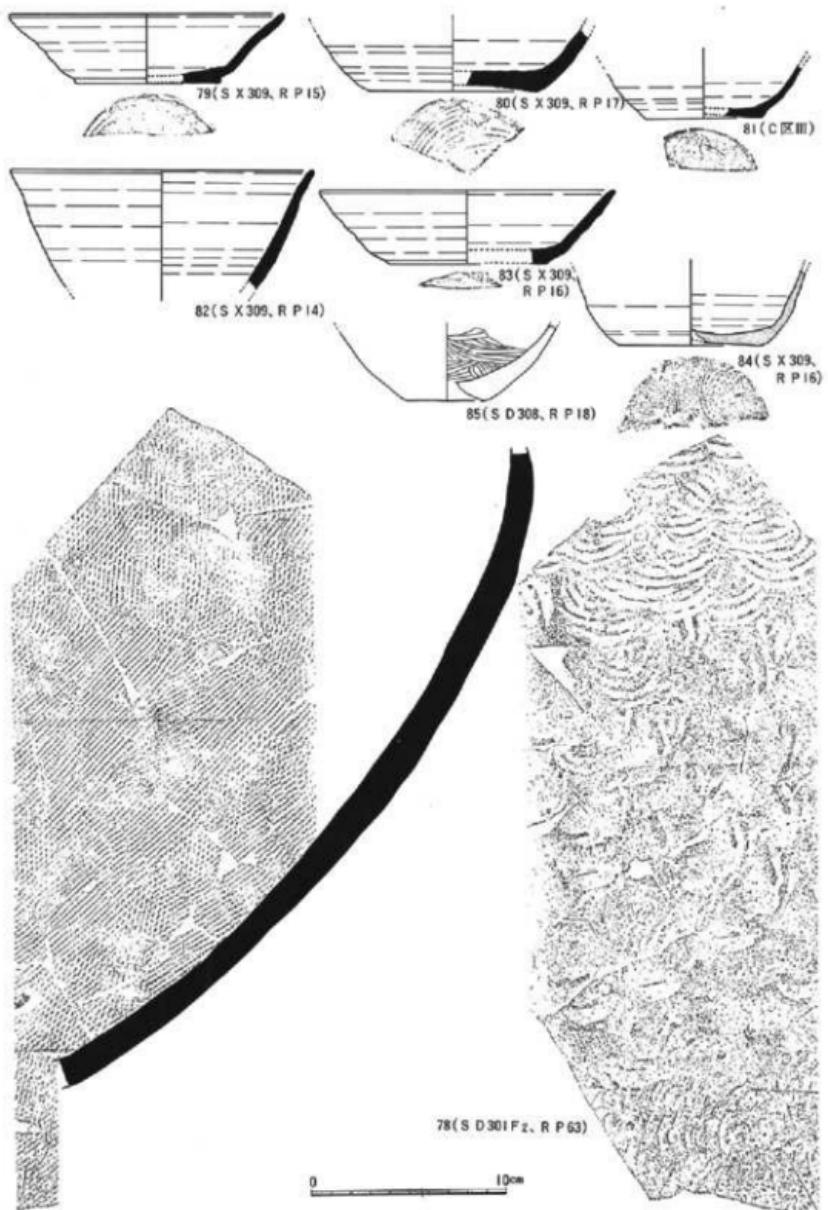
遺構外出土の土器、石器(第19、24図 図版12)

81はIII層から出土した須恵器の壺で、回転糸切り無調整である。

第19図62はIV層から出土した頁岩製の両面加工の尖頭器様の石匙である。先端が欠損し、現存長11.2mm、最大幅18.7mm、最大厚9.6mmを測る。63はSD312から出土した磨製石斧である。完形で、全長89.5mm、最大幅54.4mm、最大厚31.0mmを測る。先端に刃こぼれが認められる。



第22図 C区出土遺物(1)



第23図 C区出土遺物(2)

VIII 考 察

1 遺物の年代

本遺跡からは縄文時代、古墳時代、奈良～平安時代、江戸時代の遺物が出土した。縄文時代の遺物は基本層位のIV層から出土し、土器片は磨滅が著しく時期の判明するものはなかった。石器のうち尖頭器様の石匙は「押出型尖頭器」(佐々木他1990)と同じであり、縄文時代前期の所産とみてよいだろう。江戸時代の陶器は落込みSX103からの出土である。ここでは、古墳時代、奈良時代の土器について若干の検討を行う。

(1) 古墳時代の土器について

古墳時代の土器はB区のSX204、205、SD203、SK206、EU210、SD201等から出土した。このうち、SD201は奈良～平安時代の溝であり、混入と考えてよい。

確認した器種は壺、器台、高壺、壺、甕であるが、概して保存状態が悪く、口縁から底部までの全容を知り得るまでに復元できたものは皆無である。

器台はすべて受け部と脚部の間に貫通孔を有し、脚部には3ヶ所の円窓が認められるものがある(第18図49)。受け部は小皿の形態となる(47、48)。器台以外の器種については、さらに部分的なものであり、詳しいことは不明であるが、壺のなかには確実に複合口縁となるものが存在する(55)。

これらのことから、本遺跡の古墳時代の土師器は、山形県で宮町式(加藤1968、1973)、宮城県で塙釜式(氏家1957)と呼ばれる土器の内容と一致するものと考えられる。現在、塙釜式は大きく三段階に時期区分されているが(丹羽1974)、本遺跡の土器の内容からは結論を出すことはできない。高畠町内の当該期の資料は地獄岩洞窟の壺(佐々木1972)が知られているだけで、本遺跡で二例目となる。

(2) 奈良～平安時代の土器について

奈良～平安時代の土器は、その多くがSD101(106)、201、301の調査区を東西に縦断する溝の堆積土から出土した。溝の堆積土は大きく4層に分けることができたが、土器は底面、3b層、3a層、2層、1層の各層から出土しており、それぞれの層から出土した土器について検討を加える。また、SD115、SX309の土器についても検討を行う。

底面出土の土器

SD201から出土した土師器の高壺(60)とSD301から出土した須恵器壺(77)がある。高壺の脚部は不明であるが壺部の形態、調整技法は高畠町山の神1号墳の高壺に似る(山形県教育委員会1987)。77の須恵器は体部下半以下が欠損し調整の有無は不明で、年代決定の根拠を欠くが、次の3a、b層の土器と同時期の可能性がある。

3 a、b層の遺物

土師器の壺が5点、甕が1点、須恵器の壺が3点、甕が1点である。すべてA区のSD101から出土した。土師器の壺は体部外面の下半に1本の沈線をもつもの(第11図1)、沈線のないもの(2、3)と大形で平底状となるものの三者があり、前二者は丸底である。

須恵器は底部に手持ちヘラケズリが施されるもの(第11図14、16)と回転ヘラ切り無調整のものがある。両者とも直線的に立上り、そのまま外傾する器形となる。

これらの土器は高畠町の安久津古墳群の北目1号墳(佐々木、佐藤1985)、山の神1号墳(山形県教育委員会1987)から出土した土器の一部に類似する。年代は8世紀の前半から中葉までと考えられる。

2層の土器

A区のSD101(106)では須恵器の壺、蓋、甕が合わせて7点、C区のSD301で土師器の壺、須恵器の壺、甕、壺、赤焼土器の壺が合わせて12点出土している。SD101ではやや丸味をもって立上るヘラ切りの壺(第11図17)に、ほぼ同形態の糸切りの壺(第12図27)、身の深い糸切りの壺(28)が伴う。土師器がなく、年代決定の決めてに欠くが、須恵器に身の深い糸切りのものが出現することから、米沢市笹原遺跡第III期に(手塚、亀田1981)に併行するものと思われ、8世紀末葉の年代が与えられる。

一方、C区のSD301ではSD101とほぼ同形態の壺に加え、川西町道伝遺跡(藤田1984)のIV～V期に出現する土師器壺とVI期に出現する赤焼土器壺があり、8世紀後半から10世紀初頭までの土器が混在しているものと考えられる。

1層の土器

SD101では土師器の壺、甕、須恵器の壺、高台付壺、甕、赤焼土器の甕が出土した。土師器壺は3a、b層のものと同じロクロを使わない丸底のもので、3a、b層のものと同じである。甕は頸部に沈線をもち、土師器壺と同時期と考えられる。

須恵器は底径が比較的大きな糸切りの壺が出現する。この須恵器は年代が降っても9世紀初頭から中葉とされる笹原IV期までと考えられる。したがって、1層の土器は8世紀の前半から9世紀中葉までのものが混在していると判断される。

SD115の土器

図化できたのは土師器壺(第14図40)と須恵器壺(41)の2点である。土師器壺はロクロで整形されており、体部下端と底面に回転ヘラケズリを施すもので、笹原II～III期(8世紀中葉～末葉)に特有な形態である。共伴の須恵器壺もこの年代で矛盾はない。

SX309の土器

須恵器の壺と赤焼土器の甕がある。須恵器の壺は溝の2層と共通するものが多いが、器

高の高い焼状の高台付环(第24図82)がある。この土器は笠原のV期で初めて出現するもので9世紀の中葉から後半に位置づけられる。

以上から、本遺跡の奈良～平安時代の土器は8世紀の前半から末葉にかけてのものを主体とし、一部9世紀～10世紀初頭のものも含まれると判断できる。

2 遺構の年代

前節の検討により、本遺跡で検出した遺構の年代は以下のようにまとめられる。

古墳時代前期……B区のSX204、205、SK206、SD203、EU210がこの時期の遺構である。調査区内で竪穴住居跡は検出できなかったものの、土壤や埋設土器の存在から、本遺跡内には当該期の集落が存在するものと考えられる。

奈良時代……SD101(106)、201、301、115、SX104がこの時期の遺構である。調査区を縦断する溝は奈良時代の前半に溝としての機能をもっていたが、中葉以降に溝としての機能を失い、A区では9世紀の中葉までに、C区では10世紀の初頭までに埋没した。調査区内で住居跡は検出されなかったが、遺跡内に当該期の集落が存在する可能性は高い。SD115は奈良時代の末から平安時代の初頭にかかる時期と考えられる。

平安時代(9世紀)……SX309が当該期の遺構と考えられる。

平安時代(10世紀以降)……SB310、311の掘立柱建物跡が当該期の遺構である。掘り方内部から遺物の出土はなかったが、10世紀初頭までに埋没したSD301を切っていることから、建物は10世紀以降の所産とすることができる。

IXまとめ

都市計画街路事業道路改良工事「高畠都市計画道路3・4・1号幸町泉岡線」に伴う明神崎遺跡の緊急発掘調査の結果を要約すると、つぎのようになる。

- 1 明神崎遺跡は山形県東置賜郡高畠町大字泉岡字明神崎210番地外に所在し、北と西が開けた山麓の平地に立地する。今回は計画路線内の1,600m²の発掘調査を行い、古墳時代前期と奈良～平安時代の集落の一部を検出した。
- 2 古墳時代前期の遺構には土壤、埋設土器、溝跡、落込みがあり、竪穴住居跡の発見はなかったものの、本遺跡は高畠町内では数少ない当該期の集落と捉えられた。遺物は保存状態が悪いが、环、器台、高环、壺、甕が出土した。
- 3 奈良時代の遺構には溝、落込みがあり、調査区内では竪穴住居跡の発見はなかったものの、遺物量は最も多く、遺跡内には当該期の集落が存在すると考えられる。
- 4 平安時代の遺構には掘立柱建物跡があり、10世紀には当地域でも掘立柱建物が集落の主体となった可能性がある。

表-1 土器観察表(1)

辨認番号	遺物番号	器種	計測値 (mm)			底 部 切 断	調 整 技 法		出土地点・層位
			口径	底径	高さ		外 囲	内 囲	
11	1	土師器	150	60	40	手持ヘラケズリ	上半、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	SD101・F _{2a} (RP40・41)
	2		178		40	手持ヘラケズリ	上半、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	SD101・F _{2a} (RP38)
	3					手持ヘラケズリ	上半、ミガキ	ミガキ、黒色処理	SD101・F _{2a} (RP36)
	4					手持ヘラケズリ(?)	上半、ヨコナデ	ミガキ、黒色処理	SD101・F ₁ (RP22)
	5		175			—	口 縁 え ガ キ 体部、ミガキ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	SD101・F _{2a} (RP37)
	6			80		R	体部、ミガキ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	SD101・F _{2a} (RP44)
	7		204			—	不 明	不 明	SD101・F ₁
	8			74		木 葉 痘	不 明	不 明	SD101
	9			92		木 葉 痘	不 明	不 明	SD101・F ₂
	10	陶土器	盛		85	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP30)
12	11	土師器	瓶			多 孔 式	—	—	SD101・F ₁
	12	縹遮器	136	70	31	圓・ヘラ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP32)
	13		134	70	36	圓・ヘラ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP31)
	14		136	90	35	手持ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F _{2b} (RP39)
	15		142	80	31	圓・ヘラ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₃
	16		126	90	29	手持ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F _{2b} (RP42)
	17		136	74	35	圓・ヘラ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₂ (RP103)
	18		140	60	37	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP33)
	19			60		圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP28)
	20			64		圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101(14-19区)
13	21	縹遮器	141	60	50	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ +(^{14, 15} _{21, 22} 区)
	22			60		圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₃ (RP56)
	23		140			—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101(14-19区)
	24		144			—	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101(14-19区)
	25			84		圓・ヘラ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₃ (RP29)
	26	縹遮器	103	66	33	圓・ヘラ+付台	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD101・F ₁ (RP34)
	27	144	80	39	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₃ (RP55)	
	28	160	65	53	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₂ (RP102)	
	29	28	170	42	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₃ (RP57)	
	30		156	28	34 圓・ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	SD106・F ₃ (RP101)	

表-2 土器観察表(2)

排団 番号	遺物 番号	器種	計測値 (mm)			底部 切離	調査技法		出土地点・層位	
			口径	底径	器高		外 面	内 面		
12	31	直筒器	228		50	—	口縁部・ロクロ 体部・平行タタキ	口縁部・ロクロ 体部・不 明	SD101・F ₁ (RP19)	
	32		229			—	口縁部・ロクロ 体部・平行タタキ	口縁部・ロクロ 体部・不 明	SD101・F ₁ (RP26)	
	33		155			—	口 縁 部・ロクロ 体部・唇子目ふうタタキ	口 縁 部・ロクロ 体部・背面波アテ	SD101・F ₁ b(RP43)	
13	34	直筒器				—	体部・平行タタキ	無文アテ	SD101	
	35					—	体部・平行タタキ	無文アテ	SD101・F ₁ (RP27)	
	36					—	体部・平行タタキ	無文アテ	SD101・F ₁ (RP20)	
	37					—	体部・平行タタキ	無文アテ、カキ目	SD101	
	38					—	口 縁 部 ロクロ波状文	ロクロ	SD106・F ₂ (RP58)	
	39					—	口 縁 部・ロクロ 体部・唇子目ふうタタキ	土半、同心円アテ 下半、平行アテ	SD101・F ₁ (RP25,27,35)	
14	40	土器器	34	130	65	42	圓ヘラケズリ	上半、ロクロ 下端、圓ヘラケズリ	ミガキ、黑色処理	SD115・F ₂ (RP104)
	41	直筒器	环		75		圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD115・F ₂
	42	土器器	甕	178			—	横ナデ	ハケ目	SX104・F ₁
	43			94			木葉底	ハケ目	ハケ目	SX104・F ₁
	44	脚器	小鉢	99	65	27.5	ケズリ出、高台	ロクロ、施釉	ロクロ、施釉	SX103・F
	45		皿		56		圓・系	ロクロ、施釉	ロクロ、施釉	SX103・F ₁
17	46	甕				—	不 明	肩毛目	EU210(16-13区)	
18	47	土器器	器台	80			—	ミガキ(?)	?	SX204・F ₂ (RP87)
	48			62			—	ミガキ	不 明	SX204(RP92)
	49						—	ミガキ	不 明	SD201・F ₃
	50						—	不 明	不 明	SD201・F ₂
	51						—	不 明	不 明	SX204・F ₂ (RP89)
	52						—	ミガキ	不 明	SX204・F ₂
	53	高环				—	ミガキ	不 明	SX204・F ₂ (RP86)	
	54	甕	240			—	不 明	ナ デ	SD203・(RP93)	
	55	壺				—	横合口縁	不 明	SX204・F ₂	
	56		148			—	口縁部、ナデ	不 明	SX205・F ₂ (RP6)	
	57	壺?		66			不 明	不 明	SX205・F ₂ (RP2)	
	58			64			不 明	不 明	SD203(RP93)	
	59	土製品	土玉						SD201・F ₂ ・ ₃	
	60	土器器	高环	150			手持ヘラケズリ	ミガキ、黑色処理	SD201Y(RP82,83)	

表-3 土器観察表(3)

探査 番号	遺物 番号	器 種	計測値 (mm)			底 切 離	調 整 技 法		出 土 地 点 ・ 層 位	
			口径	底径	器高		外 面	内 面		
18	61	圓底器	环	70	-	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301(14-34E)	
22	65	土師器	境	160	65	61	不明・付合	ロクロ	ミガキ、黒色處理	SD301・F ₂ (RP69)
	66			145	75	48	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₂ (RP67)
	67			146	70	46	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₂ (RP68)
	68			78	-	-	ロクロ	ロクロ	SD301・F	
	69			136	60	45	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₂ (RP11)
	70	圓底器		65	-	-	丁堀、圓・ヘラケズリ 付合	ロクロ	SD301・F ₂ (RP64)	
	71			140	80	32	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₁ (RP72)
	72			75	-	-	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₂ (RP64)	
	73			142	74	39	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₁ (RP12)
	74			65	-	-	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₁ (RP71)	
23	75	蓋		85	-	-	不明・付合台	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₂ (RP62)
	76	直縁土器	环	45	-	-	西・系	ロクロ	ロクロ	SD301・F ₁ (RP65)
	77	圓底器		150	-	-	-	ロクロ	ロクロ	SD301・Y(RP13)
	78		境	-	-	-	格子目ふうタタキ	青海波アテ	SD301・F ₂ (RP63)	
	79			142	75	36	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX309・F ₁ (RP15)
	80			86	-	-	ロクロ	ロクロ	SX309・F ₁ (RP17)	
	81	圓底器		60	-	-	ロクロ	ロクロ	C区・皿層	
	82			156	-	-	ロクロ	ロクロ	SX309・F ₁ (RP14)	
	83			154	80	38	圓・ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX309・F ₁ (RP16)
	84	直縁土器	蓋	75	-	-	西・系	ロクロ	ロクロ	SX309・F ₁ (RP16)
	85	土師器	蓋	42	-	-	焼成後、穿孔	不明	網毛目	SD306・F ₁ (RP17)

参考・引用文献

- 氏北和典(1957)：「東北土器群の型式分類とその編成」、「歴史」14号。
- 加藤 稔(1966)：「『山形故跡』における土師器の編成」、「山形市史前卷1 横道跡」 山形市
- 佐々木洋治(1971)：「高畠町史跡 考古資料編」 高畠町
- 加藤 稔(1973)：「最上川流域における古墳文化の開拓」、「最上川流域の歴史と文化」 工藤定雄著記念会編
- 藤田育室(1981)：「山形県川西町連石遺跡発掘調査報告書」 川西町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 手塚重 亀田良明(1982)：「蓄原」 兼沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 藤田育室(1984)：「山形県川西町連石遺跡発掘調査報告書第1号」 川西町文化財調査報告書第8集
- 近藤秋輝(1985)：「日 落45次調査」、「宮城県仙美城跡調査研究年報1984」
- 丹羽 虎(1985)：「今枝野跡」「今枝野遺跡 一本杉遺跡 馬越遺跡」 宮城県文化財調査報告書第104集
- 佐々木洋治 佐藤正俊(1985)：「早通能火葬床安久津古墳群北口1号 墓・馬籠町1号 横舟銅鏡調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第95集
- 浜谷季雄(1986)：「深沢跡道路発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第102集
- 山形県教育委員会(1987)：「分布調査報告書(14)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第110集
- 井田秀和(1988)：「山形県日向御殿跡、西地区」第2回東北日本の古石器文化を語る会
- 佐々木洋治 真廣至 佐藤正俊(1990)：「平出遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第150集

図 版



遺跡遠景(南から)



A区 SD101出土状況



A区全景(南から)



A区全景(北から)



B区Ⅰ期全景(西から)



B区Ⅱ期全景(東から)



C区Ⅰ期全景(北東から)



C区Ⅱ期全景(北から)



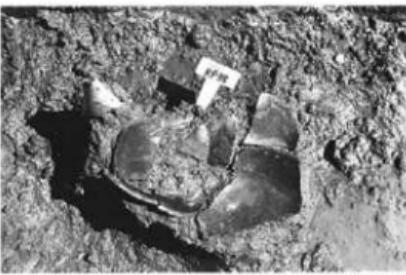
A区南半造構検出状況(西から)



S D101R P28(北から)



S D101R P33-34(南から)



S D101R P38(北から)



S D101R P42(西から)



S D101層位断面(西から)



S D101土器出土状況(東から)



S D101土器出土状況(南から)



S X 104全景(北から)



S X 104土器出土状況(東から)



S D 101南半全景(北東)



S D 110～S D 114全景(北から)



S D 106(101)全景(西から)



S D 106(101) RP 57(南から)



S D 106, RP 102・103(西から)



S D 115層位断面(南から)



S K105全景(西から)



VI層の落込み(北西から)



B区 I 潟造構検出状況(東から)



S D201層位断面(西から)



S D202層位断面(西から)



S D201 R P82(西から)



S D201層位断面(西から)



S K208 R P85出土状況(南から)



S X 204 RP87(西から)



S X 204層位断面(北から)



E U210検出状況(西から)



E U210内部(西から)



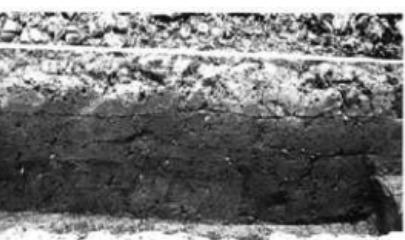
E U210層位断面(西から)



S P212柱模(西から)



S P213~218(南から)



日区基本層序(南から)



C区検出状況Ⅰ期(北西から)



S B310E B1



S B310E B2



S D301層位断面(西から)



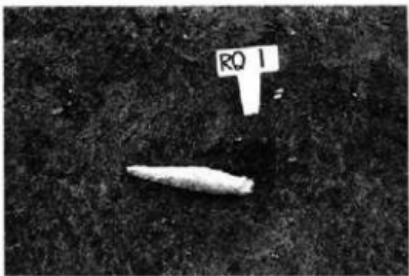
S D301R P11-12



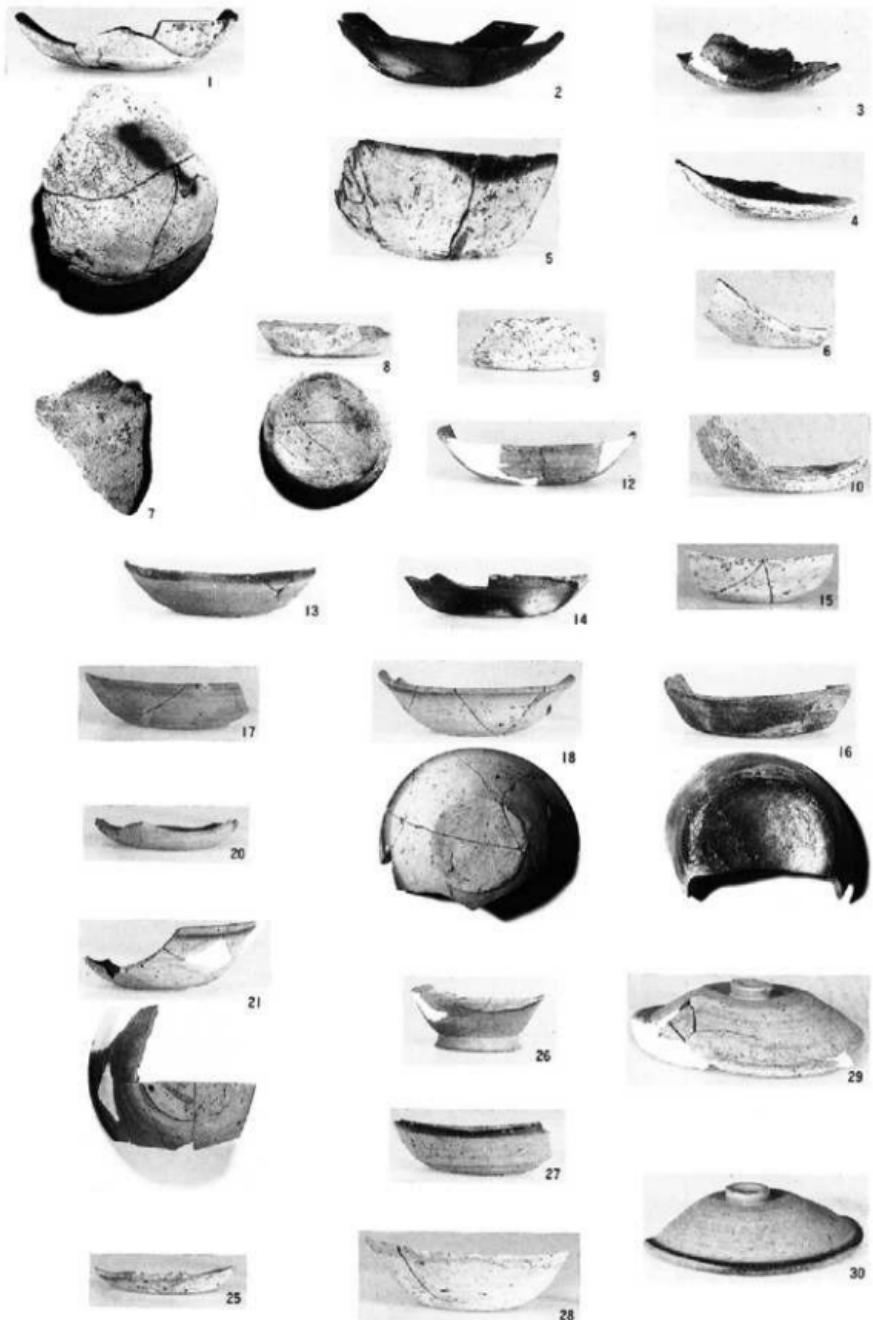
C区II期遺構検出状況

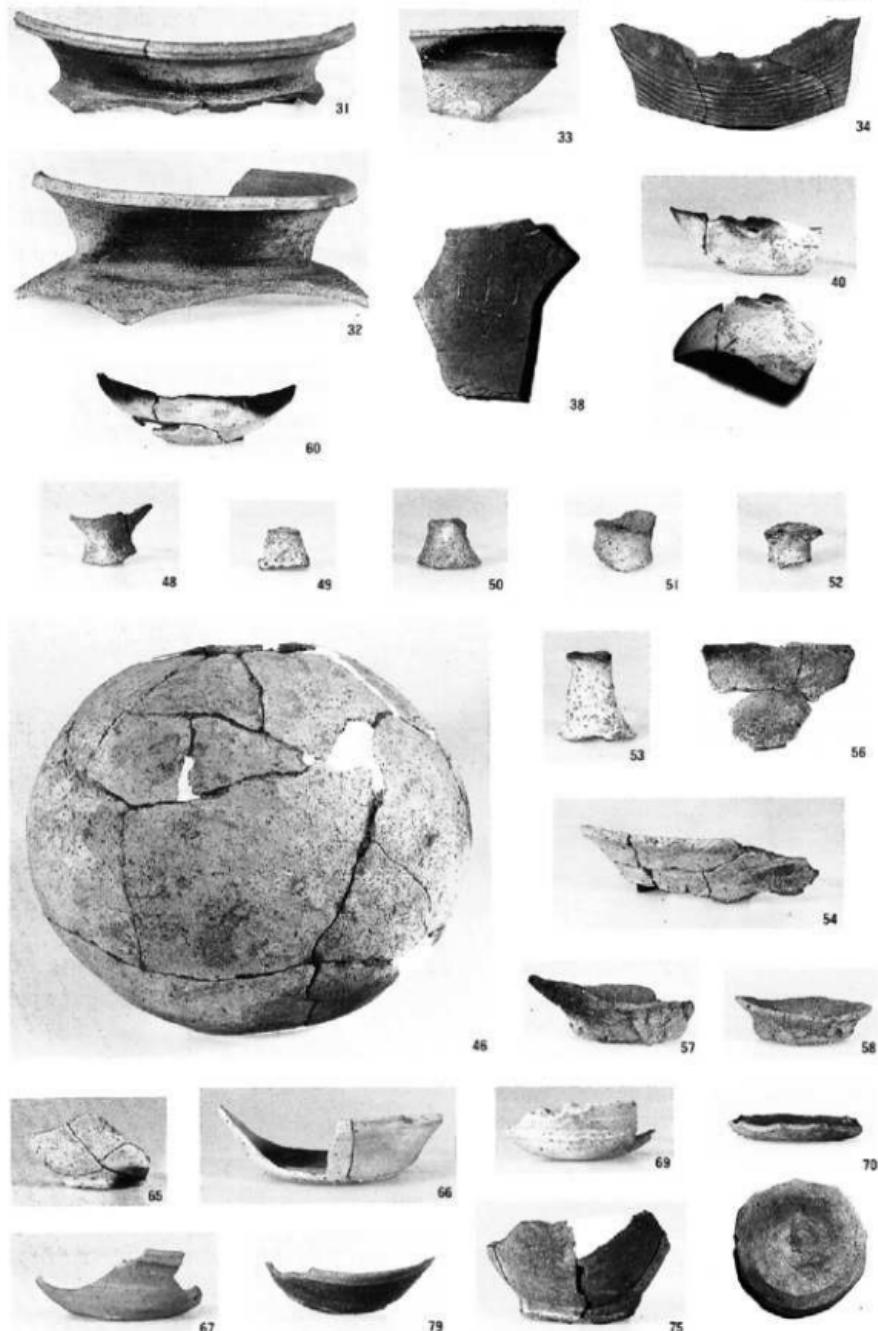


S D301R P62~64(東から)



C区VI層石器出土状況(東から)





出土遗物(2)



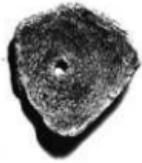
82



83



84



85



86



87



88



90



92

山形県埋蔵文化財調査報告書第157集

みょう じん ざき
明神崎遺跡
発掘調査報告書

平成2年 3月15日 印刷
平成2年 3月20日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 株式会社田宮印刷所
